求道

第五卷　第六號

明治四十年十一月二日（第三種郵便物認可）

明治四十一年六月一日發行毎月一回一日發行

求道第五卷第六號目次

求道

◎信樂　感謝　、

◎石見傳道◎宿緣◎眞摯の人◎蜑の信仰◎未見の友◎惡人正機◎頓入の信◎告別　講話　近角常觀

◎如來選擇の願心　告白

◎松島殉難故中村長谷部兩候補生の遺簡

▲兩候補生遺影

◎故吾一道兄の郷里を訪ねて　有田廣

歡咏

◎勇士をとぶらふ《新體詩》　三井甲之

◎挽歌《短歌》　增田八風

時報

石見九州方面傳道◎松本田甚直江津傳道◎求道學舍紀念日◎夏期傳道日割

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
《本郷森川町一番地》

毎土曜午後二時
第二求道會
《九段坂佛教倶樂部》

毎月二日午後七時
第三求道會
《日本橋蠣殼町説教所》

（七八月中休講）
（但シ七月十九日第三日曜ニ限リ一日開會）

求道

第五卷
第六號

信樂

聖人一代の敎化の眼目は收めて敎行信證に在り、敎行信證の中其肯綮は實に信卷に在り、聖人此に於てや信卷の初に別序を作りて曰く、

夫れ以みれは信樂を獲得することは。如來選擇の願心より發起し、眞心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顯彰せり。

是洵に信卷の骨目、敎行信證の眞髓なり、聖人一代の勸化唯此信樂開發の一念に在り、嗚呼如來廻向の淨信歡喜愛樂の眞情、大悲本願の源泉より迸り出て丶我等が貪瞋煩惱の胸中に溢れたまふ、是即ち淸淨願心也。嗚呼如來の願心なかりせばいかでか我等淤泥の心中信樂の蓮華開くべき、五濁惡世の泥中穢惡不淨の心裏に此の如き淸淨眞實の心蓮開發すること不思議也、奇蹟也、希有最勝の事實也。故に聖人曰く、然るに常沒の凡愚、流轉の群生無上妙果の成し難きにはあらず、眞實の信樂實に獲ること難し、何を以ての故に、乃し如來の加威力に由るが故なり、博く大悲廣惠の力に由るが故なり、遇々淨信を獲る者は是心顚倒せず、是心虛僞ならず、是を以て極惡深重の衆生、大慶喜心を得て諸の聖尊の重愛を獲る也と。噫、是れ何たる偉大なる出來事ぞや、言の如く、如來直接に其威神功德不可思議力を加へたまふ結果也、大慈大悲の廣大智惠力をさしむけたまひて我等の心上に顯現したまふの事實也、經に說きて大威德者と稱し、廣大勝解者と呼ふ所以のもの決して過大の激賞に非す、殊に人中の芬陀利華と名くる如き實に妙好の眞相を示すもの也、噫。

此の如く吾人極惡深重の胸中、頓に歡喜愛樂の一念起り來る所以のもの、如來選擇願心の大悲徹到したまへば也。抑々選擇願心とは世の貧窮困乏の類、愚痴下智の者、少聞小見の輩、破戒無戒の人を觀そなはして、平等の慈悲に催されて普く一切を攝せんとおほしめす大願心なり。如來既に此願心を以て我等一々の衆生を憫愍したまふ、此願心吾等の胸中に貫徹して、吾人初めて此大悲大願を仰ぐの時、身を如來の膝下に投して號泣して以て自己の罪惡を懺悔したてまつる、實にこれ信樂開發の一念、心光慈懷の中に攝取せられたる時刻の

極促なり。聖人常に宣はく、彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されば、そくはくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、是實に信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起するの謂也。

如來既に此願心を以て常に罪惡の衆生に臨みたまふ、いかにしても此佛意をとゞけんと企てたまふ、是れ大聖矜哀の善巧に非ずや、抑々大聖釋尊一代の教化を初として現時吾人人生の出來事に至るまで一として如來善巧の方便たらざるものやある、吾人は驕て教行信證の總序を閲するに曰く、然れは淨邦緣熟して調達闍世をして逆害を興ぜしめ、淨業機彰れて釋迦韋提をして安養を選ばしめたまへり、斯乃ち權化の仁、齊しく苦惱の群萠を救濟し、世雄の悲正しく逆謗闡提を惠まんと欲すと、是大聖の矜哀の事實なり。されば、和讃に曰く、

大聖おの〳〵もろともに、凡愚底下のつみひとを、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり、釋迦韋提方便して、淨土の機緣熟すれば、兩行大臣證として、闍王逆惡興せしむと、世に惡逆の事實起るときは救濟の願力あらはるゝの時也、人生苦惱極るときは如來慈光の攝照したまふの所也。看よ韋提幽閉中の苦惱は諸佛淨土の中に安養を選はしめ、闍王惡逆心中の難病は本願醍醐の妙藥を顯はす也。抑々韋提別選の正意は是れ彌陀大悲の選擇に應するものにあらずや、釋尊一代の最後に起れる達多闍王の惡逆は遂に唯除五逆誹謗正法の抑止律法を廢し來りて如來攝取の微笑の素懷を彰すものにあらずや。嗚呼人生に如來大悲の願心の發現する豈容易の事ならんや、大聖矜哀の善巧あらずんば、いかでか吾人罪惡の胸中に如來回向の眞心を開闡するものならんや。聖人信卷の終、闍王入信の涅槃經の文を引くに臨み告白して曰く、誠に知んぬ悲哉慙愧、愛欲の廣海に沈沒し名利の大山に迷惑し定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、耻つへし、傷むへし矣と、是聖人か闍王韋提を自己身上に當てゝ慚愧懺悔せるものにあらずや。

此の如く如來選擇の願心は常に吾人の上に向ひ、大聖矜哀の善巧は千古我等の眼前にあり。吾人は闍王韋提の悲劇を回顧する毎に外界の事實として法然聖人、親鸞聖人の流譎を想到せずんばあらず。教行信證の後序に曰く、竊に以てみれば、聖道の諸教は行證久しく廢れ、淨土の眞宗は證道今盛なり、然るに諸寺の釋門教に昏くして眞假の門戸を知らず、洛都の

儒林行に迷ふて邪正の道路を辨ふることなし、斯を以て興福寺の學徒太上天皇今上聖曆承元丁卯歳仲春上旬の候に奏達す、主上臣下法に背き、義に違し、忿を成し、怨を結ふ、茲に因て眞宗興隆の大祖源空法師並に門徒數輩罪科を考へず、猥りに死罪に坐す、或は僧儀を改めて姓名を賜はりて遠流に處す、予は其一也、爾れは已に僧に非す、俗に非す、是故に禿の字を以て姓とす、空師並に弟子等諸方の邊州に坐して五年の居諸を經たりきと、是實に眞假の門戸、邪正の道路か人生國家の上に關係して起れる事件にして、正に是れ化卷を事實的に顯現する者日本一州淨土の機緣の熟したる大聖矜哀の善巧に非ずや。此間に處して聖人從容として宣はく、大師聖人若し流刑に處せられたまはずは我亦配所に赴かんや、若し我配所に赴かずんは何によりてか邊鄙の群類を化せん、是亦師教の恩致なりと。

後年鎌倉にて念佛の訴起りたるときも聖人の消息に曰く、念佛をとゝめられさふらひしか、よにくせことのおこりさふらひしかはそれにつけても、念佛をふかくたのみて、世のいのりにこゝろにいれてまふしあはせたまふへしとそおぼえさふらふ、乃至詮しさふらふところは御身にかきらず、念佛まふさん人々はわか御身の料はおぼしめさすとも、朝家の御ため國民のため念佛をまふしあはせたまひさふらはゝめてたくさふらふへし、往生を不定におぼしめさん人はまつわか身の往生をおぼしめして御念佛さふらふへし、わか御身の往生一定とおぼしめさん人は佛の御恩をおぼしめさんに御報恩のために御念佛こゝろにいれてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれかしとおぼしめすへしとそおぼえさふらふ、よく〳〵御案さふらふへし、このほかは別の御はからひあるへしとはおぼえすさふらふと、是實に念佛停止の災害に報ゆるに念佛加護の感神力を以てするもの、念佛の停止は何ぞ知らむ、是れ念佛興隆の佛天の御はからひたらんとは。今時世上罪惡の劇烈なる、煩悶の熾盛なる、正にこれ大聖矜哀の善巧如來平等の大悲を吾人人生の上に實現し、攝取不捨の眞理を國家社會の間に顯彰する時機の純熟し來れる所以に非ずや。

嗚呼吾人は如來大悲母の選擇願心にはぐくまれ、大聖慈父の矜哀の善巧に導かれて人生の上に信心佛性の大慈悲を開闡し、極惡深重の衆生眞の佛弟子として同一念佛四海兄弟の社會を實現するを豫期せずんばあらざる也。

感謝

石見傳道

三月二十五日花未だ開かざるの時京を辭して石見に向ふ、九州傳道を終りて京に歸れるの時五月九日　滿城の新綠薫蒼たり、前後四十五日佛天の加護によりて石見九州に於ける有緣の御同朋と會して、佛恩の深重を喜ぶこと限なし、若し夫れ此等御同朋の慈愛溢るゝ歡迎は一々これ如來の恩賜として深く胸中に刻みて忘るゝあたはざる所、到る處に集りたまひし來聽の御同朋も同一念佛四海兄弟として今や佛と共に起き、佛と共に寢ねたまふらん。

中夜筆を採りて衷心の感謝を捧ぐ、念頭に泛ふに隨て之を書す、具畧一ならず、記臆亦疎かなり、唯一端を錄して以て感謝欄に供ふと云、爾南無阿彌陀佛。

宿緣

乘合馬車に乘じて三田尻を出立す、楊柳絲を曳きて以て驛路の趣を添ふ、同乘の人中學を終りて歸れるあり、出稼して歸れる青年少女あり、予彼等がために心中深く他日法緣の熟するを念ぜざるなし、山深くして人撲に、瓦赤ふして村趣を爲す、到る處風景送迎忙はし　皆これ一として佛大の賜ならざるはなし。日暮自轉車を驅りて同朋の迎へたまふに遇ふ、乘合馬車に前後して行く、覺えず合掌して念佛を禁ぜざりき、宿に泊して恰も其近親の訃に會し、如來選擇の願心を說く、隣室に宿れる同行の青年襖を隔てゝ之を聞き、翌朝之を告白す、果して法緣の純熟を見る不可思議といふの外なし。

神聖なる淸會

石見の人、天性摯直一點の修飾を許さず、益田町木村春雷師に着せんとするの日、栗栖君の勸に從ひ、高津を過ぎらんとす、木村師固く執て聽かず、然れども予に栗栖母君に說くの志あり、時間を短くし、强て之に立寄る、母君果して大に喜ぶ、專光寺木村師宅に着す、特に此一日を以て家族法類聞法の爲めに充つ、乃ち信卷別序の文を以て滿胸の信念を披瀝す、予此の如く神聖なる淸會に臨みたることなし、感謝極りなし、予此日を以て男兒誕生の電報に接す。

眞摯の人

木村春雷師は眞摯の人なり、高坐に上りて法を說く、其念頭に泛ぶところの妄念直に之を披瀝して人に懺悔す、隨て一

點も他人の修飾を許さず、赤裸々本眞を暴露して人間の價値をあるがまゝに直說す、罪惡の極所を告白すること酷し、之が爲に師か夫人罪惡を感すること深く、日夜煩悶すること六十餘日、遂に嬰兒を背にして自ら東京に來り、求道學舍に投ぜんと企て、未た果さず、幸に佛天の御催によりて春雷師の一言の下に踴躍して法に入る、實に眞面目の極也、此に於てや木村師亦深く佛恩を感ずる所あり、以爲らく、我一族信徒を敎化すること一日を緩ふすべからずと、突爾法要を擲て遙に求道學舍に來らる、實に昨年十一月也、今回の石見傳道は師が爲法の赤誠に報ゐんが爲に當時約せし所なりき。今や宿緣熟し來りて師が一族を初として有緣の御同朋に會し、此に四日間如來の大悲を仰ぐ、俯仰低徊前世如何なる因緣ありしかを憶ふ、世に溫厚なる人は多し、未だ師の如く眞面目なる人を見ず、所謂クロンウエル氣風の人なり、常に人に說きて曰く、信心も安心もなし、唯如來樣が御座るばかりなりと。嘗て眞摯の極若し弟子法を聞き分けざるものあれば煙管を以て頭を撲ち、他人不眞面目の言あれば起て蹶るに至りしといふ、人皆狂を以て目す、近時懺悔して曰く、嗚呼過てり我こそは信仰問題に於ては他に讓らずと、此覺悟全く誤なりき。人生如來の慈悲の外、何物かあらんと　師は益田已後石見に於ける東道の主人たりき、寺を辭して町はづれに至る、夫人母公と共に跣足にて路傍に見送らる、覺えず涙頤に交る、後追て三隅濱田に至らる、予石見人士の如く眞摯至誠の信仰を見ず、將來必ず最も眞面目なる信仰起らん。

蜑の信仰

一日土田に於て講話す。晝夜寸隙なし、講を終りて寢に即かんとす、突爾屛風の後より現はるゝものあり、媼爺六七名皆信仰を求むること切實、其近傍須津といへる漁村の人々なりと。人情素扑禮儀を解せず亦寸毫も飾なく一點の邪氣なし其一人曰く、我夫對州に漁して一日未明、由なくして船中に逝く、爾來心中閉塞少しも心を安んずべきなしと。乃ち如來の大悲を說く、夜既に央なり、未た十分意を安んずるあたはずして退く翌日三隅に法を說く、曩きの一群亦朝未明燭を乘りて來り求む。乃ち和讃を說きて曰く、彌陀觀音大勢至、大願のふねに乘じてそ、生死のうみにうかみつゝ、有情をよばふてのせたまふ是れ人生の上に下したまふ佛の御惠也と。衆皆恰然として安んず、素扑太古の民の如し。

未見の友

三隅の醫中村君來りて信仰を告白せらる、曰く、數年前病篤し、懺悔錄を得て之を讀み、遂に大悲の惠みに安んずるを得たりと、一見舊知の如く、一言一舉互に相照す、眞に御同朋也、善親友也。今回予を迎ふること殆んど兄弟相遇の感あり、かくの如き御緣の人所々にまし〳〵て、未た見えざること多からん。洵に慚愧すべき也。君雨中我を送りて手を嶺上に分つ、東西處を異にするも同一念佛共に大悲の慈光を仰く、噫。

惡人正機

二日間濱田に法を說く、求法の志の篤き其比を見ず、山來石見の人法を求むるや其憂ふる所皆同一轍に出づ、曰く、我如き罪惡多きもの如何にして助かることを得んと、是れ自己の罪を感する深きに由るもの以て其眞面目を見るべし、此に於てや法を說く者曰く、如何に罪惡深くとも佛は助けたまふべしと、其意恰も佛は罪惡を寬容したまふものゝ如し、此に於てや猶進みて曰く、たとひ佛は罪ありても助けたまふと聞くも佛の惠過分にして我は信することあたはずと、我乃ち曰く、佛は罪を寬容したまふに非ず、佛は善人を助けたまふも惡人にても助けたまふと思ふが故に、如來本願の本意、惡人正機の眞義を解するあたはず、歎異鈔に曰く、口には願力をたのみたてまつるといひて、心にはさこそ惡人をたすけんといふ願不思議にましますといふともさすがよからんものをこそたすけたまはんずれとおもふほどに、願力を疑ひ他力をたのみまゐらする心かけて邊地の往生をとけんともなげきたまふべきことなりと、佛は我等か作るべからざる罪惡を作るをこそ憐れみましますなり、惡人にてもたすけたまふにあらず、惡人を最も憐れみたまふなり、吾人は此本願なくむばいかでか生死を解脫せん、何そ我等に過分なる本願と言はんや、御文に曰く、我等か根機に相應したる彌陀如來の本願也と。

頓入の信

予濱田に在るの時、横田の某君遠く來り見えて曰く、横田にて聽聞せしも未だ安んずる能はず、猶一たび見え聞かんと欲して來る、且つ予か父今年七十三、今春已來病漸く篤し、告げて曰く、我老ゐて今に至るも未だ往生の一大事を了せず汝往き聽聞して我に告げよと。予一たび聞きて深く求法の志に感ず、忽ち香樹院師臨終の父の爲に求法し來れる少女に說教したまへるの逸話を想起し、必す此人獲信せずんば其親に

傳ふへからざるを感ず、講後其人の爲に大悲を說く、其人重ねて問て曰く、然らば佛は罪重き我か如きものでも助けたまふやと、予言下に反應して曰く、助けたまふやと、此の如き問の出つる抑々誤也、其人號泣して身を投して懊惱す、予曰く、吾人如來の大悲を仰がは何ぞ助けたまふやの疑問あらん、看よ吾人眼前に燭あらば、暗からんと欲するも能はざる也、今や如來の慈光は眼前に在り、助からざらんと欲するも能はずと、其人感泣して慈光透徹して一點の疑惑を存せず忽ち歡喜愛樂の人となれり。

告別

濱田に在るの日顯性寺に在り、住職幡谷師予を迎ふるが爲に遠く九州より歸る、予石見に傳道を終りて幡谷師と共に濱田より乘船して九州傳道の途に上る、前後九日間石見に於て親交せる御同朋阜頭に送り來りて別を惜むこと濃なり、予斷腸の思あり、嘗て航西の時、日本を離れたる已來未だ此の如きの感を抱きたることなし、木村春雷師衆中に在り大聲別を送りて曰く、先生遠く來りて法を說く、感謝極なし、今や別に臨みて一言の敎誡を請ふと、予覺えず襟を正うして曰く、人生明日の事知るべからず、相別るゝの時其覺悟を以て御慈悲を喜ばん哉、千里相照唯南無阿彌陀佛ある耳と、師大聲之を反覆して、衆をして聽かしむ、將に船に乘ぜんとす、喟然として歎して曰く、先生は出立せんとして心未だ安んぜず、問はんと欲して、衆人中を憚るの人此中に少からさるべしと、予聞て一語肺肝に徹す、聖人の歌に曰く

やみし子をのこしてかへる旅の空
心はあとにのこりこそすれ

船岸を離れ、濤聲窓を撲つ、

爾來既に七十日　石州の御同朋健在なりや。南無阿彌陀佛。

講話

如來選擇の願心

《求道學舍日曜講話》

近角常觀

上

先達來長々石見、九州方面に參つて居りました。此の先きの講話て、此の旅行中に感じました事實の大略をお話致したのてありますが、中々此の四十五日間に頂きました喜びは澤山て、一朝一夕に言ひ盡すことは出來ませぬ。て今日は猶は一度、今度は事實を辿ずに、私が今期の長き傳道中に殊に深く喜ばせて貰ひ、又常に話させて頂いた信仰上のごく肝要を重ねてお話致さうと思ひます。此の前の講話をお聞き下された方には、繰り反しになるかも知れませぬ。併し私は四十五日間常に此事を繰り反し話して居りましたのて——世間の上ては珍らしい話が好いのてある、けれども、信仰の話はいつも〳〵同じ味を繰り反し〳〵喜ばせて頂く事が、一入有り難いと思ひます。私の經驗ては或る一冊の聖敎を拜讀すると、夫からしばらくの間は、其外の事を考へる事が出來ぬ。此の四十五日の間に於て私の殊に喜ばせて頂いたのは、親鸞聖人の『敎行信證』の『信卷』の別序の一言てあります。此の一言を私は此の度四十五日間の傳道を貫きて、各地到る處て話し又色々事實の上に於て、益々此の一言を有り難く喜ばせて頂いた事てあります。

先づ初めに其文を拜讀しますと、

夫れ以れば信樂を獲得することは、如來撰擇の願心より發起し、眞心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり

信樂は「信じ樂ふ」といふ意味て、詳しく言へは淨信愛樂といふ言葉て、實に能く信仰の味ひを表はした文字てあります。獲得は獲の字も得の字も共にうるといふ文字てある。如來選擇の願心といふは——今日の講話題は實に茲から出したのてありますが——如來が我々の爲めに選びに擇んて惠んて下さる、如來の親が子供の爲に斯くも爲てやり度い、斯うも爲てやり度いと、色々と選びに擇んて下さる御意が、如來選擇の願心てある。此切なる如來の願心より、我々信仰を獲得する事が出來るといふのてあります。更にもつと之を通俗的に言ふと、我々の心中に、如來の慈悲が有り難いといふ信樂の一念が起つて來る事は、抑々我々自身の力て起るのては無い、佛が大悲の親心から、常に我々衆生に向つて〳〵下さる、其佛の御親心が我々の心中に屆きて下さるればこそあ〳〵有り難いと喜ばせて頂く事が出來るのだといふ仰せてあります。次に「眞心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり」——眞心とは「まことの心」、即眞實の信仰てある。能く世間には信仰の話に、「自分は如來の御恩を有り難いと思ふ」とか、「如來を信ずる」とかといふ風に言ふ人がある。けれども此の「信ずる」とか、「思ふ」とか言つて居る間はまだ眞實の信仰て無い。眞の信仰は、佛眞實の御まこと心が我々の心に屆いて下されて、あ〳〵有り難いと、其の佛の眞心の頂けた有樣てある。此の眞心といふ文字には、如何にも能く聖人の信仰が表はれて居ると思ひます。「まことの心」は我々自分が造るのては無い、我々は無始以來無明の酒に醉ひ、三毒の煩惱に迷ひに迷うて居るのてある。然るに佛の御まこと心は、昔より、此迷へる者、醉へる者を惠んて〳〵下さる。其處て一念此の廣大なる御親心に氣が着いて、其儘佛の眞心を頂いた處が眞實の信仰てある。所謂『御傳鈔』の

他力攝生の旨趣を受得し、飽まて凡夫直入の眞心を決定しましましけり

の眞心てあります。而して此の「眞心」を開闡する事は、大聖矜哀の善巧より顯彰せり。」——開の字も闡の字も共にひらけるといふ意味てある。大聖は、大聖釋尊をはじめ、十方三世の諸佛諸菩薩てある。「矜哀」は「哀れむ」善巧は佛が衆生を信仰に導いて下さる爲めの種々の御心配御方便てある。其處て之を一言に言ふと、眞實の御まこと心——親鸞聖人が法然上人の敎えを聞きて立所に凡夫直入の眞心を得給ひし如く、我々の心中に眞實信心が開け來る源は何うかと言ふに、抑大聖釋尊をはじめ、十方三世の諸佛如來が、何うかして如來本願の親心を知らせてやり度いといふ大悲心から、種々に色々と苦心して下さる、其善巧の御方便力から顯はれて下されたのぢやといふのてあります。

善巧方便など言ふ時は、他力の法門を聞きつけた御方は、動もすると、あ〳〵其事かと聞き流す人が有るかも知れぬ。併しながら之は信仰上ごく肝心な處てうつかり聞き流してはならぬのてあります。大悲矜哀の善巧とは今申す如く、佛陀が我々罪惡の衆生に、如來本願の親心を知らせてやり度いといふ御意から、種々樣々に苦心して、有らゆる方便を以て導いて下さる、此佛廣大の大悲心てある。此の善巧の御方便があればこそ、我々如き惡人が、如來の惠みに氣就かせて頂く事も出來るのてあります。も一つ解りやすく云ふ時は、現に我々が信樂を獲得し、眞心を開闡する事が出來るといふものは、如來願心の親心が昔より常に我々に向つて居て下さるからてある。けれども我々は昔より斯の如き廣大のお惠みを受けながら、夫に氣が就かぬ。其處て夫を知らせる爲めに、大聖釋尊をはじめとして十方三世の諸佛となつて、昔より我々一人々々を色々の方面より御指導下されてある。之は何も遠い處の話てなく、日夜我々が接する色々の悲みや、喜びの出來事が、凡て皆此諸佛如來の御方便の御催うしに外ならぬのてある。我々が日々遭遇する色々の出來事は、信仰上より見る時は一として無意味の事は無い、皆是れ我々を如來の本願に引きつけ、氣つかしむる爲め大悲善巧の御計らひなのてあります。而して此の御方便御苦勞の結果、やつと如來の御親心が我々の胸中に屆いて下されて「あ〳〵有り難き如來の御惠み」と氣が就いた時が信樂開發の一念てある。斯の如く親鸞聖人は先づ『信卷』劈頭に於て、選擇の願心と矜哀の善巧と、此の二つを差出してお喜びなされたのてある。私は今回の傳道中此の點に氣がつきて、一入深く喜ばせて頂いた事てあり

ます。

今日は大體のことは余り六かしく言はず、成る丈け手短に話さうと思ひます。くどくはあるが、も一度繰り反し申します。「夫れ以れば信樂を獲得することは云云」―之を平たく申せば、御互に自分の迷うた考から、何の彼のと言つて居るが、如來の親心は、昔より斷えず此の我々を哀んで居て下さる、といふ事であります。如來の親心は寸時も我々より離れ給ふた事は無い、佛願心の親心は所謂十刼の昔より乃至今日今時に至る迄、一念一刹那も休みなく我々衆生に向つて〻下さるのであります。而して此廣大なる親心に催されては、如何な執拗の我々も氣が就かずには居られぬ。遂に時節到來して、「成程夫程のお惠みであつたか、勿體無い」と一念親心に氣が就いて來る。此親心の屆いて下されたのが即信仰であります。

更にも一つ平たく申すならば、佛の親の方は目の醒めた覺りの境界である。之に反して我々は、久しき已前より自分本位で苦しんで居るのである、迷うて居るのである。無始已來無明の暗にさ迷うて居るのであります。其の我々を佛の目の醒めた覺の境界より御覽なる時は、如何にも哀れに堪へぬ、矜哀の涙が片時も涸く暇が無い。我々は此世に於てすら、一度自力を離れて、如來攝取の慈懷に抱かれた眼を以て、昔を考へ、苦しんで居る人達を見れば、實に同情に堪へぬのである。何うかして其人達に早く如來の惠みを聞かせたらばと思ふのである。我々は佛の惠みに眼が開いて見ると、同じ人間同士でもさうである。況んや、佛陀が覺の境界より御覽になつたら、何うであらうか。佛は我々が苦む有樣を御覽なされて、哀れみの余り殆んどじつとして居給ふ譯にゆかぬ。此の切なる大悲の御心が溢れて、佛願心の御親心となつたのである。

全體一の宗教に、自力他力、聖道淨土と、幾つもの道筋が有る可き筈は無いのであります。若し本來ならば、銘々に修行して、各自悟の佛果に到る可き筈なのであります。けれども我々は凡夫下根の衆生である。如何にして見た處が、そんな事の出來る見込は無いのである。其處で其有樣をば佛の覺りの境界より御覽下さる時は、寧ろ慈悲の涙の溢れて下さるがあたりまへなのである。而して此の大悲の親心の塊が即ち本願であります。

本願の謂れなど申すときは、何んだか六かしき事のやうに聞えるが、佛が迷ひの我々に向はせらるゝ時は、何うしても之を惠まずには居られぬ。哀れまずには居られぬ。本願の願心が出ずには居られぬのであります。世に自分は悟つたと言つて居る人て、若し他の苦しんで居る有樣を冷然と見て居るやうならば、夫は悟つたのでも何でも無い。若しほんとに悟つた人ならば、自分が今迄の迷ひが解れば解る程、彌々人の迷つてる有樣が可愛想でたまらぬ筈である。佛と申すも外の事は無い、醒めた覺りの境界より我々が無明に苦む有樣を見るに見かね、廣大の惠み、涙、親心を以て我々に向つて居て下さる御方である。否寧ろ其親心の塊が佛であると申した方が善いのであります。而して此廣大の親心が、即ち佛の本願である。我々は此本願を頂くばかりであります。

偖て以上は、初めから本願と言つても、其のほんとの味は

ひが解からぬ方が有るかも知れぬと思うて、長々と申述べた次第であります。處て何故我々は本願と聞いても、其の廣大な眞意が解かりにくゝなつたかと申すに、既に諸君が御存知の通り此本願は言ふ迄もなく法藏菩薩が世自在王佛のみ許に於てお建て下された四十八願の事である。處が我々は本願と聞くと、其根本たる大悲の御親心を頂かないで、先づ其の發願の次第や、理屈の詮索を初めようと爲て居た。夫だから從來何程聞いても、どうもほんとの味が頂けなかつたのであります。本願とは抑々何であるか、先程より度々繰反す如く、佛が廣大な覺りの境より、我々が迷ひの有樣を御覽下されて、如何にも哀れみの情に堪えさせられぬ、其の大悲の極はまりの御親心、之が本願の願心である。

全體佛の御姿が何であるか、阿彌陀佛御自身がもと〳〵此の本願より顯はれ出て下されたに外ならぬのであります。善導大師の御文に、先づ

問て曰く、一切諸佛三身同じく證し、悲智果圓にして亦無二なるべし。方に隨て一佛を禮念し課稱せんに、亦生を得べし、何が故に偏に西方を嘆じて、專ら禮念等を勸る、何の義有るや。

といふ問を設けて、之に答へられてあるお言葉に、

答て曰く、諸佛の所證は平等にして是れ一なれども、若し願行を以て來し收むるに因緣なきに非ず。然に彌陀世尊もと深重の誓願を發して、光明名號を以て十方を攝化し給ふ、但信心をして求心せしむ。

とある。一切諸佛の證の境界は、所謂眞如法性の境界て此の境界に二つあるべき筈は無い。諸佛の境界は皆平等にして一つである。然るに此の證の境界より我々衆生を御覽下された時、廣大なる哀れみ、涙、親心が凝て顯はれ出て下された御姿が阿彌陀如來である。此の眞如法性の證の境界よりもと深重の誓願を發して、我々十方衆生を攝化せん爲めに顯はれ下されたか阿彌陀佛である。即ち阿彌陀如來はもと〳〵此の廣大なる本願より顯はれ下された姿である。十方の有らゆる迷ひの衆生を救はんとの大願心より顯れ出て下されたに外ならぬのであります。さりながら我々茲の味は此以上に言ふ事が出來ぬ。此の已上に言ふ時は、不可思議の佛智を凡夫の小見を以て思議したてまつる事となる。『自然法爾章』に、「此の道理を心得へた上は自然の事は常に沙汰するな、自然をさたせば義なきを義とすといふことは却て義のある事となる」とお戒め下されたも此の故であります。今は唯筋道を話した丈けである。我々は唯此本願の御惠みを頂きさへすれば夫で善いのであります。

偖て斯くの如く、一切諸佛には、夫々皆願があるが、今阿彌陀如來は三世十方諸佛の本師本佛である。今阿彌陀如來の本願は、三世十方諸佛の根本大悲の大願心である。此事は親鸞聖人が度々仰せられた處であります。『行卷』には宣はく、

悲願は喩ば……猶ほ大地の如し、三世十方一切の如來出生するが故に。云々。

即ち三世十方の諸佛といふも、此阿彌陀佛本願の親心を知らせんが爲めに出現されたのである。大聖釋尊も此本願を我々

に知らせんが爲めに出世して下されたに外ならぬのである。三世十方の如來出世の正しき本意は、唯此の不可思議願を說かんとなりであります。之は何も宗派的の小さな話で申すのでは無い。此本願の一道を外にして、我々凡夫の助かる法は無いのである。此本願こそ實に先程より言ふ如く、眞如本性の絕對の境界より、眠れる我々を救はんとして顯はれ出で給ひた唯一の一道なのである。十劫の昔より、世に佛がある以上、本願が無くて何う仕よう。若し本願の無い佛が有ると云ふならば、私は夫は佛でないと言ふに躊躇せぬ。世に佛が居給ふ以上、我々が迷ひ苦む有樣を御覽なされた時、大悲の親心に溢れて下さるは、これはもう何よりも確かな事なのであります。而して此の切なる大悲の御親心、願心によつて、我々は救ひにあづかる事が出來るのである。

本願は實に如來大悲の御親心である。而して此の御親心は常に一瞬の絕え間なく我々に向つて注がれてあるのであります。我々は本願と聞くと、何か歷史的の事のやうに考へて、遠い昔の事のやうに思ふて居る。けれどもそう言ふ間も皆んな既に此の廣大なる御哀みの中に居るのであります。信樂を獲得するといふは、其の廣大なる御惠みに氣が就きて、今迄の長き迷ひの眠の醒めた時である。信仰を得る得ぬといふと、何か六かしき事のやうであるが、決してさうで無い。一寸譬へて言ふて見ると、我々空氣の中に居るものは、空氣を吸はずに居られぬ如く、水中に在る者は、水を飲まずには居られぬ如くである。我々は昔より此の廣大なる惠みの空氣や水の中に育ちて居るのである。けれどもまだ其の空氣や水の事に氣が就かず、いつ迄も之を求め惱んで居るのであります。併しながら、何うかして此の親の有る事に氣就かせてやり度いとの大悲の御哀れみは、彌々惠みの空氣や水を以て推し掛けて下さる、其處で遂に此佛廣大の妙願力に催ふされて、氣づかずには居られなくなるのであります。我々は昔より斯の如き廣大の御親心を受けて居るのである。夫であるから、我々如き罪惡の凝塊なれども、此の御慈悲が到つて下さる時は、此の親心に催うされて、自然法爾と到つて下さるのである。我々が斯の如きお惠みの中に在りながら、猶ほ之に氣が就かず、救ひを求め安心を求めて居る有樣は、之を眼の醒めた佛の境より御覽下さる時は、恰も水中に居て渴を叫び、空氣中に居て窒息すると騷いで居るようなものであります。

又此の廣大の親心が、我々一人〳〵に行き渡つて下さる有樣は、恰も空氣が一點と雖も行き渡らぬ隅なきが如く、一分の暇も空しくせずに到り届いて下さるのである。即ち上來申すが如く、佛の本願は實に廣大なる御哀れみであるが、此の廣大なる御哀れみは、實に我々一人〳〵の爲めに、向つて居て下さるのであります。佛の大悲は一刻一瞬も我々の上を離れずに、常に我々が此の本願の親心に氣就くやう〳〵と導いて居て下されてある。之れ即ち初めて申した大聖矜哀の善巧の味はひに外ならぬのであります。一體佛の大悲は、先きにも言ふ如く、選擇本願の願心と、大聖矜哀の善巧と、此の二つに籠つて仕舞ふのである。大聖釋尊が此世に出現下されて、八十年間法をお說き下されたも、唯此の佛本願の親心一つを我々に知らせようとの大悲善巧の御惠みに外ならぬの

である。釋尊は此世一代はかりてはない、永久我等を導きたまふのである。涅槃經の中に、彌々佛涅槃に入り給ふとき、

如來は常住にして變易あることなし。

とお說き下されたは即ち之を申されたのである。この意味は設ひ釋尊の色身は今涅槃の雲に隱れ給ふとも、本願の一道は永劫に常住して我等を惠んで下さる。汝等衆生決して悲むに及ばぬ。我は唯此の一道を汝等衆生に知らせんが爲めに出て來たのであるとお示し下されたのである。又『觀經』の中に韋提希夫人に向はせられて、

汝今知るや不や、阿彌陀佛此を去ること遠からず、

とお說きなされたも、此の大悲矜哀の善巧が、常に一分の絕え間もなく我々に注がれてある事をお知らせ下されたのである。

偖て斯くの如く佛陀が瞬時の休みもなく我々の爲めに善巧方便して下さる所以のものは、唯我々をして此廣大なる本願の親心を氣就かしむる爲に外ならぬのであります。佛のみ親は永劫の昔より、唯之のみに苦心して、暫ばらくも我々の上を離れず、一子の如く懸念して、下されてある。私はよく人が一寸とした偶然の出來事から信仰に入らるゝ有樣を見て、如何にも奇異に堪えぬ事があるが、此廣大なる大悲の善巧と承はると、實に能く解かるのであります。私は昔の人が飛花や落葉の有樣を見て悟りに入られたといふ事を聞いて居る。如何にも此矜哀の善巧が居て下さる以上、緣さへ來らば片々たる落花を見ても信仰に入られぬ事はあるまいと思ひます。聖人の『和讃』に宣はく

釋迦彌陀は慈悲の父母　種々に善巧方便し——
我等が無上の信心を、　發起せしめたまひけり。

此の廣大の善巧に催ふされて、あゝ有り難き如來の願心であつたと、氣の就いた時が信仰である。

偖て又、此の廣大のお惠みを、有り難いと頂くに、別に思案も何も入らぬ。若し茲に近親の者が死んだとする。あゝ之は自分への御催促である、お慈悲である、御手廻はしであると、口には言ひながらも、中心有り難いと氣が就かぬ間は、何んにもならぬのであるが、一度び心を虛くして如來の大悲に氣附て見ると、どうも近親の死んだは唯事でない。あゝ之は全く自分を信仰に引き入れようとの大悲善巧の御催促であつたか、夫とも知らず今迄徒らに悲んで居つたは勿体ない、如來の大悲は斯く迄親切に我等の上に付き添うて居て下されたのであつたかと、一念氣が付いた時は、もう〳〵お慈悲の中に包まれて居たのである。信仰を得る、得ぬなど申すと、大層六かしく手間のかゝる事のやうであるが、決してそうで無い。唯自分が如何しても罪惡妄念の凡夫である事に氣を就けさせて貰ふと同時に此如來本願の廣大なる親心を仰かせて貰ふ計りである。一念此お惠に氣が就いた時は、即座に信樂開發する事が出來るのであります。

私は此の旅行中、段々と喜ばせて貰つた事でありますが、外にも一つ私の何うしても忘れられぬ有り難き事があります。夫れは私は先年緣あつて、坂東報恩寺秘藏の親鸞聖人御直筆の『敎行信證』を拜見する事を得たのである。其時殊に此の『信卷』別序を拜見して、何とも言へず有り難く感じたので

あります。夫は何うかと言ふと非常に大きな文字に認められてあるのでありますが、其筆蹟の元氣なる事、聖人の信仰が文字の上に躍如として顯はれて居るのである。殊に此別序の一枚の文字に至つては其力強き事、……信樂獲得の獲の字など力の籠てある有樣などは、殆んど形容も出來ぬ程である。中にも初めの「信樂を獲得することは」より「善巧より顯彰せり」迄の二句を書かれた處の如きは、聖人が「此の廣大なる願心に氣が就かぬか」「此の信心を頂かいては仕方がないぞ」といふ切なる御意が文字の上にあり〳〵と顯はれて居る事は疑はふに疑はれぬのである。勿論別序の御文は此二句のみならず、此の後の處も際立ちて有り難いのである。今日の話には、此二句てよいのでは有りますが、序だから後の處をも拜讀して見ます。

然に末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈みて、淨土の眞證を貶しめ、定散の自心に迷て、金剛の眞信に昏し。斯の如き廣大の御本願が有るに係はらず、今日の人間は僧と云はず、俗と云はず、皆な自性唯心に沈んて、佛の御國に行く事を信ぜず、まことの證に入る事を知ら無い。之は今日でも動もすると、さういふ人が有るのであります。定散の自心といふは、所謂定善散善てある。定善といふは、今日の言葉て云ふと、冥想したり考へたりする事によつて信仰に至らうとする人てある。散善といふは、實行によつてゆかうとする聖人である。聖人が言はるゝには「今日皆なが信仰々々と言つて居るのは、殆んど此定散二善を出でぬ。一体考へて信仰だとか、實行して信仰だとか、抑々夫は何といふ事を思うて居るのであるか。之れみな皆なが自力の計らひにこだわつて、金剛の眞心に暗きが致す處てある。」と嚴しくお誡め下されたのてあります。當時聖道諸宗が全盛の最中に立ちて、余り思ひ切つた言ひ方のやうてありますが、一度び如來本願の親心に呼び醒まされた眼を以て、皆なが凡夫自力の迷心に囚はれて居る有樣を見た時は、是非とも之れ計りは飽迄言はずには居られぬのてある。此廣大の親心を其儘頂いた信心なれば、是れこそ實に消すにも消せず、燒くにも燒けぬ金剛堅固の眞信てあります。次に

爰に愚禿釋の親鸞、諸佛如來の眞說に信順して、論家釋家の宗義を披閱し、廣く三經の光澤を蒙つて、特に一心の華文を開く、且らく疑問を至して遂に明證を出す。

爰に愚禿釋の親鸞――隨分思ひ切つた言ひ方てあります――今茲に我が言ふ處の彌陀の本願は、親鸞自分が言ひ出したのては無い。是れ實に諸佛如來の眞說てある。大聖釋尊のお說き下されたのみならず、六方恒砂の諸佛が唯この一つを說かんが爲め出現なされたのてある。其の諸佛如來の眞說に信順して論家釋家の宗義を披くに――論家といふは、「淨土論」をお作り下された天親菩薩を指されたのてある。天親菩薩は『淨土論』に於て「世尊我れ一心に、盡十方無碍光如來に歸命す」と、一心の味はひをお敎え下された。釋家といふは觀經の釋をお書き下された善導大師かと思ひます。善導大師は觀經の疏を著はして觀經の三心を明らかにして下された方てある。此の論家釋家の宗義を披閱し廣く三經の光澤を蒙つて――三經には、御存知の通り大經には至心信樂欲生の三心を說き、

觀經には至誠心、深信、回向發願心の三心を說き、阿彌陀經には一心をお說き下されてある。此三經の光澤を蒙つて、特に一心の華文を開く。――一心の華文といふは、即ち今申した天親菩薩の一心の文てあります。親鸞聖人は信仰の實驗から、大經の三心即ち此の一心に外ならぬ事をお示し下されたのてある。茲には此事を仰せられたのてあります。且らく疑問を至して遂に明證を出す。――之は此の『信卷』の中に特に名高き三心の字訓釋なる一段が有つて、先づ初めに「何を以ての故に論主は三心を合して一心と言はれたか」といふ疑問を起し、夫から之に段々と明證を擧げられてある。此事を仰せられたてあります。次に

誠に佛恩の深重なるを念じて、人倫の誹言を恥ちず、淨邦を忻ふの徒衆、穢域を厭ふの庶類、取捨を加ふと雖も、毀謗を生ずること莫れ。

之て畢りてあります。誠に佛恩の深重なる事を思ふと、人倫の誹言などはかまふて居られない。之れ實に親鸞聖人の信仰の特色てある。之と同じ意味の御文を又後序の畢にも繰反してお出になるのてあります。曰く

茲に因て眞宗の詮を鈔し、淨土の要を撫ふ。唯佛恩の深きを念じて、人倫の嘲を恥ちず。云云

此の廣大の御恩を思ふと、人が何と言はふが、彼と言はふが、そんな事は顧みて居られ無いのてある。淨邦を欣ふの徒衆、穢域を厭ふの庶類、取捨を加ふと雖、毀謗を生ずる事莫れ。後の此書を見る者は、設へ取捨を加へてもよいから毀謗の念を生じてはならぬと、最後に强くお誡め下されたのてある。如何にも力强き御信仰てあります。斯くの如く御文は極めて簡單てあるが、如何にも强い御言葉てある。而して其のお意が又筆蹟の上に實に能く活躍して顯はれて居るのてあります。聞く處によれば、眞宗大學の諸君が聖人の六百五十回忌の紀念として、聖人の歷史を編述せらるゝさうてある。夫には必ず此御眞筆本の寫眞も載る事と思ひます。殊に「諸佛如來の眞說とは如何にも力强き何とも言へぬ、有り難い御言てある。以上は余事ながら感じたまゝを申した次第てある。

中

偖て之より彌々話を進めて、今日の講話題、「選擇の願心」の味はひを申さうと思ひます。「夫以れば信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起す、」――申す迄も無く選擇の文字は『選擇集』の選擇より來たのてある。此の選擇本願の味はひに就きては、既に度々申した事てあるが、併し私は飽きる迄幾度でも繰り反す積りてある。どうも此の選擇本願の御敎は幾度頂いても有り難いのてあります。

丁度今日親鸞聖人の『敎行信證』の御眞筆の事を申したと同時に、も一つ有り難い事を申します。夫は此頃京都の蘆山寺に在る法然上人御眞筆の『選擇集』の御稿本が東京に來て居つて、私は又不思議にも夫を拜見する事を得たのてある。之は實に有り難いのてあります。夫は法然上人の眞筆といふ事てあるが、併し全部が上人の御直筆てあるかどうか、其邊は何とも申す事は出來ぬ。が兎に角初めの『選擇本願念佛集、往生之業、念佛爲本』の文字丈は、他と際立ちて筆蹟が違つてある。之丈は法然上人の眞筆たる事、明了なのてあります。と

云ふものは、親鸞聖人が『敎行信證』の後序に、お書きなされてある如く、法然上人は弟子の方々に『選擇集』を寫させて、最後に卷頭の文字丈を自から書いておやりなされた事があるのである。其文は斯うであります。

然に愚禿釋の鸞、建仁辛酉雜行を棄て、本願に歸し、元久乙丑歳恩恕を蒙つて選擇を書く、同年初夏中旬第四日、選擇本願念佛集の內題の字、並に南無阿彌陀佛、往生之業、念佛爲本と、釋の綽空の字とを、空の眞筆を以て之を書かしめたまひき。

即ち初の選擇本願念佛集といふ內題の文字と、南無阿彌陀佛云云と釋綽空の文字丈けを——綽空は當時の聖人の御名前である——上人眞筆を以て親鸞聖人へお書き與へなされたのである。併し親鸞聖人の頂かれたは、淸書であるが、之は原稿本である。兎に角漢文でさへ〳〵と書いてあります。併し又法然上人は原稿をお書きなさるにも、自筆で書くよりも、口で言つて弟子に書かせられた方が多い故、或はさうかも知れませぬ。けれども又卷末の一文——夫は上人が善導大師を信ぜらるゝ有樣をお書きなされた集中最も有り難い處である、其處の文字は亦一段ときは立ちてある。又處々に書き入れのしてある處もある。又中には「裏を見よ」と書いてある處も有つて、其處の裏面を見ると引文が書き込んてある。兎に角斯の如き稀代の有り難き書物を拜見した事てあります。不思議にも因緣有つて斯の如き珍らしき聖敎を拜見する事の出來たは、私の實に感謝に堪えぬ處てあります。

處て今言ふ『選擇集』卷末の一段の際立ちて有り難い文といふは何かといふに、法然上人は御存知の通り、善導大師の南無阿彌陀佛の御本願を釋せられた御敎化を見て、他力念佛に入られたのてある。夫てあるから法然上人が善導大師を信ぜられる事は實に深い。其の上人の信念を披瀝せられた一段の文字てあります。此の一段は親鸞聖人の『敎行信證』ていふと、正に後序に當るのてある。聖人が後序に於て、深く法然上人の御指導を喜ばれたと同じ具合に、法然上人は亦『選擇集』卷末に於て、言を極めて善導大師の御指導をお喜びなされたのてある。而して此の一段が最も力强いのてあります。今茲て一寸拜讀致します。

靜かに以るに、善導の觀經の疏は、是れ西方の指南、行者の目足あり。然れば即ち西方の行人は、必ず須く珍敬すべし。就中每夜夢中に僧有つて玄義を指授す。(之は善導大師が親經の疏を書かれた時に、每夜夢中に一人の僧が現はれて、一々大師を指授せられたといふ事があるのです。此事は大師自から仰せられた處てある。)僧といふは恐らくは是れ彌陀の應現なり。爾れば又此文は彌陀の直說と謂つ可し。既に寫さんと欲する者は、一に經法の如くせよと云ふ。斯の言誠なるかな。仰て本地を討れば、四十八願の法王なり。十劫正覺の唱、念佛に憑るに有り。俯して乘迹を訪へば、專修念佛の導師なり。三昧正受の誥、往生に疑なからんや。本迹は異なりと雖も、化導は是れ一也。是に於て貪道昔茲の典を披閱して、ほゞ素意を識り、立どころに餘行を舍て、こゝに念佛に歸す。(即ち法然上人は善導大師の觀經の疏の「一心に專ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥時節の久近

を問はず、念々に捨てざる者是を正定の業と名く、彼の佛願に順ずるが故に」の文を見て、立所に彌陀の本願に歸し、選擇本願念佛をお唱へ下されたのてある。茲は之を申されたのてある。)其より已來今日に至るまて、自行化他、唯念佛を締とす。然る間に希に津を問ふ者あれば、示すに西方の通津を以てし、適々行を尋ぬる者あれば、誨ゆるに念佛の別行を以てするに、之を信ずる者は多く、信せざる者は尠し。當に知る可し、淨土の敎は時機を叩て行運に當れり。念佛の行は水月を感じて昇降を得たり。而るに今圖ざるに仰を蒙つて辭謝するに地無し。(之はもと此の『選擇集』は關白兼實公の依頼によつて編述せられたるものてある。此事を言はれたのてある。)仍て今愍に念佛の要文を集め剩へ念佛の要義を述ぶ。唯命旨を顧て不敏を顧ず。是れ即ち無慚無愧の甚きなり。庶幾くば一たび高覽を經ての後は、壁底に埋めて窓前に遺することなれ。恐らくば破法の人をして惡道に墮せざらしめんが爲なり。

關白兼實公の仰せによつて書くは書いたけれども、若し窓前に遺しておく時は、之を見て色々誹謗の念を起し、惡道に墮する人が出來る。夫てはならぬから高覽の後は深く壁底に埋めて、人に見せて呉れるな、とは、實に何とも言へぬ勢ひの溢れたお言葉てあります。

偖て夫程迄にして、お書き下された『選擇集』は、抑も何をお書き下されたのてあるか。此事は既に度々雜誌や講話の上て申上げた事てあるが、今日はも一度之を申し上げ度いと思ひます。言ふ迄もなく、夫は選擇本願の一ッをお示し下されたのてある。其選擇本願とは、之を法門の上より言ふ時は、即ち第十八の本願てある。

之は甚だ面白い比較てありますが、法然上人は一切經を五度迄、——實は六　　みなされたといふ事てある。然るに其法然上人の『選擇集』には、一切經の文が一個所も引かれて居無い、唯淨土の三部經、及び善導大師を主として、外二三の淨土の祖師達の文をお引きなされてある丈けてある。之は何ういふ譯かといふに、法然上人の御意ては、釋尊御一代の間一切經の御說法は實に澤山てあるが、我等が助かる眞實の敎といふは、彌陀の本願南無阿彌陀佛の一ッてある、其他は皆余行てあると、他を皆な切り捨てゝお仕舞ひなされたのてあります。處が其の法然上人の南無阿彌陀佛の御敎化を受けて、信仰にお這入りなされた親鸞聖人の『敎行信證』には、一切經の文が縱橫無盡に引用せられてあるのてある。之は頗る味はひのある對照だと思ひます。即ち法然上人は、一切經は彌陀の本願南無阿彌陀佛の一ッてあると仰せ下されたのてある。夫を親鸞聖人は又其次に、其彌陀の本願南無阿彌陀佛の一ッを說くが釋尊一代のお說法一切經の精神てあると、お示し下されたのてある。夫てあるから親鸞聖人は、設へ『涅槃經』てあれ『華嚴經』てあれ、苟くも如來とあれば皆な彌陀如來　佛とあれば皆阿彌陀佛として讀んでお出になるのてあります。

其處て其の『選擇集』の上にお說き下された阿彌陀如來の選擇本願といふは何かといふに、ごく通俗的に申しますと、佛が我々衆生の苦しんで居る有樣を眺めて、斯くも仕てやり度

い〳〵と、色々選びに擇んで下された願である。即ち大經の四拾八願は皆な是れてあります。四拾八願の中には、或は我國土には三惡道を無からしめんといふ願もある。或は我が國土の人間には好醜の差等をなからしめんといふ願もある。或は世には不其の者がある、我が國土には斯の如き不具者無からしめんといふ願もある。或は又世には衣服の爲めに苦しんで居る者がある、我が國土に來る者には斯の如き苦惱無からしめ、若も得んと思はゞ念に隨ひて、直に應法の妙服を得せしめんといふ願もある。其他或は天眼道を得させ度いとか、或は神足通天耳通を得させ度いとか、種々色々の願があるが、皆な是れ佛が我々の爲めに選びに擇んで下された選擇本願である。言ひ換ふれば如來の御親心の塊なのであります。偖て斯くの如く四十八の廣大なる願があるが、我々が此の廣大なるお惠みを頂く時に、之を一々に頂くのかといふにさうては無い。設へば子供が親から、財産や教育や衣服や色々の親の惠みを頂くにしても、之を眞實に頂く時は、「あゝ斯く迄の廣大なる親の惠みであつたか」と、唯其親心を受ける一ッて頂くのである。其の如く今此の四拾八の廣大なるお惠みを頂くに——茲には四十八と限られてあるが之は假りに數えて四十八となつた迄である。佛が我々を惠んで下さる一々のお心は、實は無量なのである。其無量の願を頂くに、唯此の第十八の願一ッを以て凡てを一度に頂く事が出來るのであります。善導大師の『玄義分』には宣はく、

四拾八願一々願じて曰く、若し我佛を得んに、十方の衆生我が名號を稱して、我が國に生れんと願せん、下十念に至るまで若し生れずは正覺を取らじ。

と、四十八願一々異つてあるが、其のもとを尋ぬれば、我々衆生を救くつてやり度いといふ廣大なる御親心の外にないのである。其の根本親心が顯はれて實に第十八の願となつたのであります。

偖て其の第十八願の廣大なる親心とは何であるか。私は實に今回の旅行中、諸方で唯此事ばかりを話して來たのである。今日は一つ『選擇集』の本文によつてお聞きに入れやうと思ひます。實は私がくだ〳〵とお話するよりも、本文を拜讀した方が解り易いのである。—— 或はもつと早くから本文をお聞きに入れた方がよかつたも知れぬのである。

彌陀如來、餘行を以て往生の本願と爲さず、唯念佛を以て往生の本願と爲すの文。

實にきわどい言ひ方であります。『選擇集』中、第十八の選擇本願念佛を正面より堂々とお說き下されたは、實に此の一段である。此の中の殊に眼目ともいふ可き一節を讀み上げて見ます。

乃至、第十八の念佛往生の願は、彼の諸佛土中に於て、或は布施を以て往生の行と爲すの土あり、或は持戒を以て往生の行と爲すの土あり、或は忍辱を以て往生の行と爲すの土あり、或は精進を以て往生の行と爲すの土あり。或は禪定を以て往生の行と爲すの土あり、或は般若を以て往生の行と爲すの土あり、或は菩提心を以て往生の行と爲すの土あり、或は六念を以て往生の行と爲すの土あり、或は持經を以て往生の行と爲すの土あり、或は持咒を以て往生の行

と爲すの土あり、或は起立塔像飯食沙門及び孝養父母奉事師長等の種々の行を以て各往生の行と爲すの國土あり、或は專ら其國の佛名を稱して往生の行と爲すの土あり、之はつまり諸佛の淨土にゆくに色々の行がある。或は布施を行じて行く國もあり、或は戒を持ちて行く國もある。現に目白の雲照律師の如きは、現今に於ても澤山なる戒を持ち、修行をしてお出になる。外にもまだ色々の修行をして居られる方が澤山有るのである。或は又起立塔像飯食沙門奉事師長等の行を以てゆく國もある。又菩提心——菩提心とは、佛道修行に一番肝心な「悟に進まんと欲する心」である。今日の言葉で云へば求道心であります。其菩提心を以て往生する國土もある。又最後に、專ら其國の佛名を稱へて往生する淨土もあると、仰せられたのである。爾るに

此の如く一行を以て一佛土に配するは、是れ一往の義なり、再往之を論ずるに其義不定なり、或は一佛土中多行を以て往生の行と爲すの土あり、或は多佛土中、一行を以て通じて往生の行と爲すの土あり、是の如く往生の行種々不同にして具に述ぶべからず。即ち今前の布施持戒乃至孝養父母等の諸行を選び捨てゝ、專稱佛號を選び取る、故に選擇と云ふなり。

如來選擇本願の謂はれを、小氣味のよい程明瞭にお示し下されたものである。猶ほ夫からも少し進んだ處に

又往生要集に問ふて曰く、一切の善業、各利益あり、各往生を得、何が故ぞ唯念佛一門を勸むるや。答へて曰く、今念佛を勸むることは、是れ余の種々の妙行を遮せんとには非ず、唯是れ男女貴賤、行往坐臥を簡ばず、時處諸緣を論ぜず、之を修するに難からず、乃至臨終に往生を願求するに、其の便宜を得ること念佛に如ざればなり。

即ち此の念佛一つは男女貴賤を簡ばず、行往坐臥時處諸緣を論ぜず、如何なる者でも稱へる事が出來る。夫故此念佛一行を選取して下されたのである。其處で次に

故に知んぬ。念佛は易きが故に一切に通じ、諸行は難きが故に諸機に通せず。然れば則ち一切衆生をして平等に往生せしめんが爲に難を捨て易を取つて本願と爲す歟。若し夫れ造像起塔を以て本願となすときは貪窮困乏の類定めて往生の望を絕たん。然るに富貴は少く、貪賤は甚だ多し、若し智慧高才を以て本願と爲さば、愚鈍下智の者定めて往生の望を絕たん。然るに智慧は少く、愚癡は甚だ多し。若し多聞多見を以て本願と爲さば、少聞少見の輩は定めて往生の望を絕たん、然るに多聞は少く少聞は甚だ多し。若し持戒持律を以て本願と爲さば、破戒無戒の人は定めて往生の望を絕たん。然るに持戒は少く破戒は甚だ多し。自余の諸行之に準じて知るべし。應さに知るべし、上の諸行を以て本願と爲さば、往生を得る者は少く、往生せざる者は多し。然れば則ち彌陀如來法藏比丘の昔、平等の慈悲に催ふされて、普く一切を攝せんが爲めに、造像起塔等の諸行を以て、往生の本願と爲さず、唯彌名念佛の一行を以て、其本願と爲すなり。

如何にもひどい言ひ方である。夫だから此の卷末に於て「破法の人をして惡道に墮せざらしめんが爲なり」と、言はれた

のであります。現に拇尾の明惠上人は――拇尾の明惠上人は諸君も御存知の如く、北條泰時が感化を受けた有名な智識である。其の明惠上人は、此『選擇集』を見て、是れ惡魔の言であると怒られた。殊に最も手ひどいのは。菩提心迄を往生の行にあらずと切り捨てゝお仕舞ひなされた事であります。佛敎に於て菩提心は殆んど修道の根本である、其菩提心を切り捨てるといふは、普通佛敎に於ては有り得べからざる事なのである。夫だから「惡道に墮せざらしめんが爲なり」と言はねばならぬのである。現に今いふ明惠上人は態々『摧邪輪』といふ書を著して、痛く法然上人を攻擊なされた。其外當時の名僧知識皆な口を並べて上人を攻擊せられたのであります。

併し此等の南都北嶺の人達の言ふやうなれば、我々は眞に助かるべき道がない、破戒無戒五逆十惡の我々は、唯永久に無明に流轉するより外に仕方が無いのである。けれども夫では如來本願の親心が、いつ迄も開けて下さらぬのであります。之は法然上人が自分で仰せられたのでなく、阿彌陀佛の本願に斯くあるのである。現に本願の文に於て「十方衆生、若不正者、不取正覺」と、お誓ひなされてあるのである。唯今拜讀した『選擇集』の御文の冒頭に宣はく、

無量壽經の上に云はく、設ひ我れ佛を得んに、十方の衆生至心信樂して我が國に生れんと欲して、乃至十念せん、若し生れずは正覺を取らじ。觀念法門に上の文を引いて云はく、若し我れ佛を成らんに、十方の衆生我が國に生れんと願じて我が名字を稱して、下も十聲に至らん、我が願力に乘じて若も生れずば正覺を取らじと。

往生禮讃に同く上の文を引いて云はく、若し我れ佛を成らんに十方の衆生我が名號を稱して、下、十聲に至らん、若し生れずは正覺を取らじ、彼の佛今現に世に在しまして、成佛したまへり、當に知るべし本誓重願虛しからず、衆生稱念すれば往生を得。

と。此の最後の『往生禮讃』の文は、即ち法然上人が親鸞聖人に書いて與へられた處の文であります。此事は聖人自から『敎行信證』の後序に於てお誌しなされてある。

同き日、空の眞影申し預り圖畫し奉る。同き二年閏七月下旬第九日、眞影の銘は眞筆を以て、南無阿彌陀佛と、若我成佛、十方衆生、稱我名號、十至十聲、若不正者、不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念、必得往生の眞文とを書かし給ひき。云云

此は聖人が御年三十三歲の時の事である。

偖て此の第拾八の本願、此の願一つで我々は如來廣大のお惠みを頂く事が出來るのである。言ひ換ふれば此本願は、佛陀のみ親が我々衆生に、「如來は現に斯く如く汝等衆生を待つて居る。どうか此の吾か親心を衆生の心に屆けしめん」といふ親心である。之が選擇の親心なのであります。而して其親心を屆けて下さるに、何を以て屆けて下さるかといふに、念佛の一行を以てして下さるのである。我々は戒を持つ事も出來ぬ、經を讀む事も出來ぬ。善といふ善は一も出來ぬ煩惱の凝塊である。此の人間を救ふて下さるに、唯南無阿彌陀佛と、佛の親心を知らしめ、惠みを知らしめ、其惠み一つで助け取らんとあるが　彌陀本願の願心なのであります。

度々申す事でありますが、も一度言はせて頂き度い事がある。夫は江州の牧田孫右衞門といふ人が信仰に入られた時の話であります。牧田氏は何ういふ話を聞いて信仰に入られたかと言ふに、親が子供の爲に着物を作る時に、親は選びに擇んで作るのである。此の着物は汝の爲にならぬ、之を着せてはお前の爲めに善くないと、澤山の中からえりにえり拔いて、最後に最も子供に適當したものを自分が手物で織り出して下された。一筋々々糸を吟味して長い年月を費して、非常な辛勞の結果子供に一番適當したものを作り出して下された。之が念佛の一行であると、凭ういふ譬へてある。之は實に味ひの深ひ譬へであります。即ち念佛は佛の親が我々衆生の爲に自から織り出して下された最も適當なる着物である。今の如く親が子供の爲に、あれか之れかとえりにえつて下さる親心即ち如來選擇の願心である。其の親心の願心から出來上つて下された着物、即ち念佛であります。言ひ換ふれば選擇本願の親心即ち南無阿彌陀佛の一行である。選擇本願即ち南無阿彌陀佛、親心といふて着物の外にないのであります。聖人は『行卷』に於て「即是其行といふは即ち選擇本願是なり」とお示し下された。南無阿彌陀佛といふは外では無い。如來の親がこれ一つを以て助けんとある御親心の塊であります。

處て牧田氏が此の一言を聞いて信仰に入られたは何うかと申しますに、我々子供の方では親が夫程の苦心を經て作つて下された着物なるに係はらず、夫が氣に入らぬ。自分の迷ふた計らひから、此が欲しい、あれが欲しいと自分勝手な見立を爲て居て、親の與へて下された衣服を素顏に着る事が出來ぬ。――之は今日人生は活動であるとか、理想であるとか、奮鬪であるとかと言つて居る人達は皆な是である。一見甚だ高尙な考のやうでありますが、是等の人は皆な選擇本願の親心に背いて居るのであります。又人間は善い事を爲さねばならぬ、惡い事は止めねばならぬと、倫理道德を唯一の標準として居る人もさうである。勿論倫理道德をやつて惡いと言ふのではない、奮鬪活動がいけないといふのでもありませぬ。けれども佛より言ふと、佛の選擇の願心より伺ふと、そんな事が出來る位なら、如來の本願は全く無意味になつて仕舞のである。設ひ念佛を稱へるにしてもさうである。念佛を自分の修行の爲に使つたり、念佛を以て自分が信仰に進む道具に用ゐたりするならば、本願念佛の意味は全く無くなつて仕舞ふのであります。本願の親心は何であるか、先程より繰反し申すが如く、外の着物ではいけないからどうか此の一枚を着せたいといふ御親心なのである。佛は本願に於て、疾くに衆生の有樣を御承知下されて、念佛の外は皆駄目である、戒行でもいかぬ、奉事師長でもいかぬ、念佛已外は皆ないかぬと切り捨てゝお仕舞下されてあるのである。夫を我々が若し自分に戒行や奉事師長が出來るものゝ如く思うて居たらは、大間違い。我々は戒行も持てず、奉事師長も出來ぬものなるが故に――のみならず五逆十惡の惡人なるが故に、此の念佛の一法を以て救けて下さるのである。佛は南無阿彌陀佛の一法を、斯の如き五逆十惡の惡人の爲に、選びに擇んでお與へ下されたのであります。此の南無阿彌陀佛の惠み一つで助けるといふ廣大なる親心、選擇の願心、之が實に我々の頂き處であり

ます。親鸞聖人は如來の選擇本願と言つた丈けては未だ物足らぬ處から、も一歩力を強めて、如來選擇の願心とお示し下された。選擇の願心、即ち佛が衆生に最も適應した南無阿彌陀佛の一つを以て、十方衆生悉く救はねは措かぬと發願して下された其の廣大の親心、之が實に我々の頂き處なのてある。一枚の着物は親が實に此の廣大の哀れみから、態々子供の爲めに拵へて下された處のものてある。親か子供を呼び懸けて言はるゝには「汝よく考へて見よ、外の着物ては三日ともつまいが。そんなものを着て居ては御前の爲にならぬから、親は此の着物を汝に着せんために大に心を碎いたのてある。親は唯お前か親の言を聞いて、素顏に着てさへ呉れゝば、夫丈けて滿足するのだ」と、如何にも親切の極みつた言葉てある。

牧田氏は此の親の一言を聞いて、直ちに信仰に入られたのてあります。夫迄此の牧田といふ人は色々人の爲めに盡された人てある。或は近隣に病人あれば、車をやつて、醫師の許へ連れていつてやるとか、或は貧窮の者には施しを爲てやるとか、隨分此の慈善的方面にかけては前から人の出來ぬ行ひを仕て居られたさうてあります。けれども夫迄は却て此の行爲が心に止まつて、本願念佛の親心が頂けなかつたのてある。處が此の着物の譬て。選擇本願の親心を聞くなり、ハッと氣が就いて見ると「自分は今迄此の廣大の佛願に背き、我儘勝手な選びをつけて居たものてある。自分て何か出來るやうに思うて居たは大なる驕慢てあつた。佛の親心は夫程迄に此の惡人を哀れんて居て下されたのてあるか、夫とも知らず今迄自分の勝手て横着をして居た事が勿体ない」と言下に本願念佛の御惠みを頂かれたのてあります。此間も傳道の歸途、同氏にお目にかゝつた時、「貴氏が聞かれた着物の譬は、正に如來選擇の願心に當る、之を聞かれた時の貴氏のお心持はどんなでしたか」と聞いたら、「何とも彼とも言ふにも言へぬ、まるで腹がでんぐりかへるやうてあつた」といふお話てある。私は之を聞いて、成程親鸞聖人が「信樂を開發することは如來選擇の願心より發起す」と言はれたは其筈ぢや、と感じた事てありました。此中には御存知の方も有るかも知れぬが、嘗て牧田氏が江州から茲へ飛んで來られた事がある。あれは此時てあります。佛の親は我々に修養させて助けようとも仰せられぬ、戒行を持つから助けようとも仰せられぬのてある。唯南無阿彌陀佛と、着物を着るときは其着物を作りて下さつた親心即本願を信じた時てある。夫てあるから我々が、此廣大なる親心を「あゝ有り難い」と一念頂いた時は、即ち南無阿彌陀佛と、知らず識らず稱べる時てある。「親は夫程迄にして自分の爲めに着物を作つ下されたか、あゝ有り難い」と親心が頂れた時は、即ち其着物に手を通す時てある。此の廣大なる本願の願心の親心が頂ければ、何人と雖も念佛を稱へぬ譯にはゆかぬ。此本願の親心をうけ玉はつて、あゝ有り難や南無阿彌陀佛と心に頂いた時が、即ち信樂開發の一念てあります。

之は甚だ根性の惡い言い方てありますが、我々、親の作つて下された着物を着て居ながら、心の底て「こんな物ては〳〵」と不滿足に思つ居るならば、夫は親心が頂けたのても何でもない。設へ口には如何程念佛を稱へて居られても、法然上人の三百八十余人のお弟子中、眞實に此の親心の頂れた人は、五

六輩にだも足らなかつたのてある。其外は皆な、親の作つて下された着物だから着ねばならぬ〳〵と、無理に着て居た人のみてある。併しながら、夫ては親の親切を頂いたのても何ても無い。處が親鸞聖人は法然上人の選擇本願念佛の御教化の眞意を頂いて、飽迄之をお喜びなされた。聖人は『和讃』の中に宣はく、

本師源空世にいでゝ、　弘願の一乘ひろめつゝ、
日本一州ことゝく、　淨土の機緣あらはれぬ。
智慧光のちからより、　本師源空あらはれて、
淨土眞宗をひらきつゝ、　選擇本願のべたまふ。

其の聖人がお喜びの餘り、殆んど滿腔の心血を吐露してお記し下されたが、即ち「夫以れば信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起す」の一言てあります。其お意は何うかといふに、否やても應ても我々が喜はずに居られぬのは、此の廣大なる願心が居て下さるからては無いか、折角親が苦心して作り上げて下された着物を頂きながらも、苦情云ひながら着て居るやうては何にもならぬ。此の廣大の親心に氣が就けば、あゝ今迄は濟まなかつた、喜ぶより外は有るまいが、といふ慈愛溢れた御教化てある。聖人は又『歎異鈔』に宣はく

彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ、と。

今迄修養して行かう、考へて行かう抔と思うて居つたは、まだ自分が夫程の惡凡夫と氣が就かなかつたからてあるが、成程我々は此の廣大なる南無阿彌陀佛のお惠てなければ行けぬから、佛は溢るゝ親心より我々に之を與へ下されたのてあつたか「そくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんとおぼしめし立ちける本願の添けなさよ」と、着物を押し戴いた時が、選擇の願心の至つて下された時てある。其着物を戴いた時、即ち選擇願心の至つて下さるなり、――「彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まふさんと思ひ立つ心の起る時、攝取不捨の利益にあづけしめ給ふなり」　で、思はず口に念佛が溢れて下さるのてある。之が南無阿彌陀佛の着物を其儘着せて頂いた有樣てあります。しかしなから念佛は口に稱へるのが主ては無い、着物は身に着けるのが主ではない。いくら着物を着念佛を稱へても、肝心の親心が頂かなければ滿足は出來ぬのてある。其の親心とは何か、先程も申す如く、佛の親心は無量てあるが、其の無量の親心を其儘衆生の胸に屆け込んて助けずにはおかぬとある根本の親心てある。是れ實に第十八の選擇本願の願心てある。善導大師が「四拾八願一々願じて曰く……若し生れずば正覺を取らじ」と、示されたも茲てあります。

偖て今の如く親心々々と申しますと、眞宗信徒の弊として、親心を知つて居ながら、着物を着ない者が出來て來る、併しながら如何程親心は解つて居ても、着物を着ないならば、眞實に親心が頂けたのても何ても無い。如何に本願が有り難い〳〵と、着物の出來上つた譯を知つて居つても、肝心の南無阿彌陀佛を着用しなければ何にもならぬのてある。今も申すが如く、「彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて往生を遂ぐな

りと信じて　念佛申さんと思ひ立つ心の起る時に、攝取不捨の利益にあづけしめ給ふなり、」である。本願を信すれば、南無阿彌陀佛を稱へずには居られぬのである。本願を信すれば、南無阿彌陀佛を稱へずに居る人が甚だ少くないのであります。聖人は『歎異鈔』の又の文に

親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

と仰せられてある。又『和讃』には宣はく、

彌陀の名號となへつゝ　信心まことにうる人は、
憶念の心つねにして　佛恩報ずるおもひあり。

其の着るといふは何でもない、如何にも廣大なる佛本願の御惠みと頂いて、南無阿彌陀佛々々々と念佛を稱へさせて貰ふ事であります。

私は今度九州を廻はつて、九州の人達の如何にもよく念佛を喜ばれるには、深く感じた事であります。之は如何にもさうである、彌陀の本願は南無阿彌陀佛の一行の他は無いのであります。けれども、斯く云へばとて自分から勵みて稱へる意味では更々無い。自分で強いて稱へなければならぬのは、まだ本願の親心が充分に頂かれて居ないからである。之は先程申した親の着物を着ながら、心に不滿を抱いて居る人の事である。

下

上來度々繰り反し申すが如く、彌陀の選擇本願念佛は、佛の親が、外のでは間に合はぬ、唯此の一枚を以て助けると、作り上げて下された着物である。夫を、親の着物も有り難いが、外のを着ても差支は無い、と取つたら是れ又大變な間違であります。其は所謂雜行雜修におち入つたものである。併しながら其處を又邪見におちて、阿彌陀佛の本願は惡人を助けるとの親心であるから我々は何程惡をしてもよいのであると、こういふ意味に取つては猶更ならぬのであります。抑々我々は如何しても外の道では助からぬ五逆十惡の惡人である　所謂愚癡の法然房、愚禿親鸞である。聖人は『歎異鈔』の第二章に、

自余の行をはげみて佛になるへかりける身が、念佛をまうして地獄におちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

と仰せられた。即ち我々は如何なる行も行へぬ五逆十惡の惡人である。地獄一定の凡夫である。如何しても助かる道の絶え果てた人間である。處が佛の本願は、我々の此の境界を哀んで下されて、外の行ではいかぬから、唯我が念佛の一行を以て助けるとお呼びかけ下されたのではないが、も一つ言へば我々が斯くの如く、念佛以外如何なる行を以てしても助からぬ凡夫なる事を早くより觀破つて下された事が、既に選擇本願の親心に他ならぬのである。然るに、南無阿彌陀佛も有り難いが、外の行でも出來ると思ふて居るのは、まだ此の親心を知らぬものである。親は我々を助くるに、外の行では助からぬから、唯念佛の一法を以て助けると言つて下されたのであります。けれども茲が動もすると、佛は念佛の一行で助

けて下さるが、併し其の已外の行を試みても差支は無いのだといふ風に思ひ易いのである。抑々外の道を試みてもよい杯と思へるのは、まだ自分の如何に淺間しきかを知らぬからである。言ひ換ふれば、佛の親が念佛といふ一枚の着物を、態々作つて下された親心がまだうつくしく頂けぬからである。反す〳〵すも本願の親心を能く聞かねばならぬのであります。親鸞聖人は『信卷』に仰せられて宣はく、

聞くといふは、衆生佛願の生起本末を聞きて疑心あることなし、之を聞くといふ。

と、佛願の生起本末を聞くといふは外ではない。我々が如何なる行も及ばぬ惡人なるが故に、唯南無阿彌陀佛の惠み一つで助けるとある、其廣大なる選擇の願心を頂く事である。そうして其の仰のまに〳〵願心の塊、南無阿彌陀佛を稱させて貰ふ事であります。此の願心の頂けた時が、即ち信樂の開發の極促であります。

猶ほ進みて諸方面より申しませう。之は今度石見へ參つて知つたのでありますが、石見の國の人は皆一樣に、如來の本願があまりに有りかたすぎて、却て頂けぬと言はれる。之は石見の人が他迄眞摯質朴な處から出た言葉である。こんな事いふ人は、外には何處の國へ參つても無いのであります。石見の人は誰に遇つても、自分の如き惡人を助けて下さるとは、餘りに有りがた過ぎて、何うしても解らぬと言つて居られるのである。併如何に眞面目でも是れ又本願の親心がしつかり頂けて居ない點は同じであります。抑々親が此の着物は善人の爲に作つたのであるが、惡人にも着られるやうに仕て置いたと、仰せられるのなら、惡人の我々は遠慮も入るかも知れぬ。けれども今阿彌陀佛の本願念佛の着物は、そんな着物か、そんな善人が着る爲の着物であらうかどうか。若し阿彌陀佛の本願に、惡人でもとあるならば、吾が如き惡人ではどうかと心配するも無理は無い。けれども惡人でもぢやなく其惡人を助けるぞとの本願である。若し惡人でもとあるならば、善人なら猶更よいが、惡人でもよい、といふ風に聞える。併しながら惡人でもよいといふやうな本願が、抑々何處にあるか、も一つ解り易く云ふなら子供に盗みをしてもよいといふ親が何處に有るか、併しながら、設ひ如何に喧ましく云はれても、一日も惡事は止められぬ我々である。常にいかぬ事ばかりして居る我々である。石見の人が自分の如き惡人といはれるのは、蓋し本當を言つて居られるのであります。然るに大悲の佛は、惡人でもぢやなく、其惡人が有る故に、矜哀のあまり立ちても居てもたまらぬ處から、阿彌陀佛と顯はれて下されたのである、佛は其惡人が哀れて堪えられぬと、言つて下さるのである。されば斯の如き我々惡人を救つて下さるが、佛の親ではないか。我々惡人が哀れに堪へぬ處から顯はれて下されたが佛ではないか。佛の親は此の一枚の着物は亂暴物の惡人のために作りて下されたのである。然るに自分如き惡人は、其着物が着られるか何うかと遠慮をして居るのは、佛が折角我々亂暴者の爲めに選びに選んで下された親心を受けぬものである。抑々選擇本願の成立が何うであるか。我々如き破戒無戒、五逆十惡の惡人の爲めに、態々佛が南無阿彌陀佛の一つを選擇攝取して下されたが、選擇の本願ではない

か。されば其の南無阿彌陀佛のお惠みを頂く者は、斯の罪惡の我々の爲めと頂かねはならぬ。此の本願念佛の着物は、丁度我々惡人に、きつしり合ふやうに出來てあるのである。然るに若し此衣服は私には大き過ぎる、よ過ぎると云ふならば親が我等の如き亂暴者の爲に作りて下された手織の價値を知らぬのである。即ち同時に自分の亂暴者たることを知らぬのである。此の着物を着ながら、苦情を言つて居るのもよくないが、遠慮をするのも、此の願心を頂かぬからであります。

其處でいつも言ふ御文でありますがあまりに有りがたいからも一度拜讀して見ます。夫は先程も一寸申した『歎異鈔』末文の御文であります。

聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよと、御述懐さふらひしことをいまさら案ずるに、善導の自身はこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねにしづみ、つねに流轉して、出離の緣あることなき身としれといふ金言に、すこしもたがはせおはしまさず。されば、かたじけなくもわが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきほどをもしらず。如來の御恩のたかきことをもしらずして、まよへるをおもひしらせんがためにてさふらひけり。

久しく此の求道學舍にお出になつて、常に講話を聞いてお出下された一人のお方が、先日眞宗大學の聖人降誕會の席で、我々は御恩を御恩と知らずに居るといふ一言を聞いて、ふつと信仰に入つて喜ばれた方がある。私は昨今之を思ひ出しては常に有り難く喜んで居る事であります。まことに我々は曠劫已來如來の御恩に生息して居ながら、御恩を御恩と知らぬものである。

まことに如來の御恩といふことをば、さたなくして、われもひともよしあしといふことをのみまうしあへり。

爾るに我々が日夜心に思ひ、口に言つて居る處は何かといふに、殆んど善し惡しの二つを離れぬ。人の事を善し惡しと言ふにあらずんば、自分の事を善し惡しと計らつて居るのである。併しながら善しといふも、惡いといふも共に人間煩惱の迷執である。如來の御恩を忘却した勿體なき振舞である。

聖人のおほせには、善惡のふたつ總じてもて存知せざるなり、そのゆへは如來の御こゝろによしおほしめすほとにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおほしめすほとにしりとほしたらはこそ、あしさをしりたるにてもあらめど。

抑々善し惡しなど、本當の事が我々人間の物差を以て分るものか、若し我々が如來の仰せられる通りに出來るならば、そりや、善をなしたと言つてもよかろう。又如來の惡しと思召す通りに、分るならは、そりや惡を知つたと言つてもよからう。けれども我々の思ふ所は、善いといふも惡いと云ふも皆忘念である。

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごとたはことまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ、おほせはさふらひしか。

設ひ如何なる善、如何なる惡であらうとも、此人生の事は、凡て皆な妄念である、煩惱である、空事、たはごとである。一として眞實ある事はないのである。けれども只其中に彌陀の本願念佛の着物のみは、佛から與へて下された着物である。此の天地間に眞實のまことといふは只此れ一つ、此の外に我々の賴むべき道は、一つも二つも有る事無いのである。是れ實に佛が苦海の衆生を哀れみて、選擇施與して下された佛本願の念佛であります。法然上人が一代の間一世の誹難攻擊を顧みず、他迄唱導して下された所以のものは、唯此の選擇本願念佛の一法を我々に知らせ度いとある廣大の御眞心一つからであります。而して斯の如き選擇本願の廣大なる思召と承はれば、我々罪惡深重の衆生は、唯其の廣大なる御親心に感激して、御恩を謝し奉るより外は無いのであります。

而して法然上人の此の選擇本願念佛の御敎化を聞きて、直ちに信仰にお入りなされたが親鸞聖人であります。『御傳鈔』には茲の處を次の如く仰せられてある。

建仁第一の曆、春のころ、(上人廿九歳)隱遁のこゝろざしにひかれて、源空聖人の吉水の禪房に尋ねまいり給ひき。是れ則ち世くだり人つたなくして、難行の小路まよひやすきによりて、易行の大道におもむかんとなり。眞宗紹隆の大祖聖人、ことに宗の淵源をつくし、敎の理致をきはめてこれをのべ給ふに、たちところに他力攝生の旨趣を受得し、他迄凡夫直入の眞心を、決定しまし〳〵けり。

處が先程も申すが如く、是れ程廣大な本願なれ共、御緣が無くて解ら無かつた人達は、梅尾の明惠上人を始めとして皆な異口同音に、「之れ惡魔の言である、」「旨目の言である」と云つて、えらく腹を立てられた。其極遂には南都北嶺の僧侶達の議によつて、御師法然上人を初め御弟子達七人の流罪四人の死罪となつたのである。

話の序に申しますが、私は先月初めに申した『選擇集』の稿本と共にも一つ珍らしきものを拜見致したのである。夫は京都の二尊院所藏の、有名な法然上人『七箇條起請文』の原本であります。此の『七箇條起請文』といふのは、御存知の通り「あまねく予か門人と號する念佛の上人等に告ぐ」といふ書き出して或は一句の文も伺はずして他宗を誹謗してはならぬとか、或は世の戒行を持ち、律儀を守る者を難行と名けて非難する事を停止せよとか、斯の如く七箇の條目を擧げて懇切に弟子達の心得違ひをお戒めなされたものである。之は法然上人は現に、或人が持戒破戒の功德の淺深を伺はれた時、壘の上をお叩きありて此の壘が有るによりてこそ、破れたるか、破れざるかの詮索も入るが、初めより壘のないものを何と言はうか。末法の今は持戒もなく破戒もない、されば、もとより持戒破戒の詮索なんが其の必要もない、唯斯の如き平凡夫の爲めに發し給へる本願なれば、彌々名號を喜ばせて頂く外は無いのであると仰せられた如く、上人は素より末世に戒行なんか認めてお出でなかつたのである。けれども當時の念佛行者の中には、肝心の如來のお惠みを言はずに、唯無暗と戒律を惡く言つた連中が有つた故、之を嚴重にお戒めなされたものであります。而して其『起請文』の文末に、第一に源空聖人を筆頭として、次には信空上人、次に感聖上人といふ順序で、凡

て百八十九人の御弟子方御自筆の連署がある。其の第八拾六人目に、僧の綽空といふのがあるのであります。處で此の「綽空」が果して親鸞聖人であるか何うか、といふ事が、昔より大に喧しき問題であるが、私が熟々拜見する處では、從來諸方で拜見した聖人の文字其儘である。そして此の次に一人隔て、蓮生の署名がある。斯く御弟子方が一々自筆署名なされた有樣て有つたらうと思はれます。此の「起請文」は元久元年十一月七日の日附けになつてあるが、此の綽空の御名は九日追加の分にある。從來此の綽空は聖人と別人の如く言つて居つた事てありますが、私が拜見する處確に聖人の御自筆に相違ない。私は此度此事を知つて實に有り難く喜はせて頂いたのであります。

偖て斯くの如く法然上人をはじめ、御弟子方迄、此の撰擇本願の一法を御說き下されたため、死罪流罪になつて下された。關白兼實公の如きは身を以て上人に代はり度いと迄申されたけれども、夫も成立たなかつたのてある。其後上人は彌々此の廣大のお惠みをお喜びあらせられ、配所讃岐にお出の後も增々喜ばれるばかりてあつた。法然上人の讃岐御流罪は、御年七拾三の御時てあります。彌々御出立といふ時に、御弟子達が「此の如き御老體て讃岐へお出になれば、再び御面會が叶ふまい」とて痛く悲歎せられた時に、上人の御敎化が實に有り難い。其時上人の仰せに、汝は其のやうに悲むが、我が齡すでに八旬に迫つて居る。此上都にあつた處て、何程の長き生が出來ようか。併し因緣さへ盡きすば、又過はれぬにも限るまい。抑々驛路は昔より聖者の行く處てある。既に唐土には一行阿闍梨、又我國ては役優婆塞の例がある。亦謫所は昔より權化の住む處てある、唐土の白樂天、我が朝の菅丞相をはじめ、上古の英聖は皆さうてあつた。況んや末世の凡愚に於ては、勿論の事てある。既に斯の如く、古來聖者の先例も有る事なれば、毫も耻とし愁とするには足らぬのてある。否寧ろ此時に於て、却て邊鄙の群類を化益することが出來るのは、實に是れ莫大の利生てある。併しながら唯源空の痛む處は、抑々源空が言ふ處の淨土の法門は、濁生衆生の決定出離の要點てあれば、今此の法門に仇をする輩は、定めて神明の冥瞰を受けるて有らう。若し然らば貪道の流罪、弟子の死罪、斯の如き事は是れ實に前代未聞、世の常綸を破つた珍事てある。世に生き長らふる者は定めて因果の空しからざる事を、思ひ合すてあらふ云云と、斯く言つて又直ぐに一人の門弟を顧みて、頻りに一向專念の義をお說きなされたと申す事てある。處が又御弟子西阿上人が此樣子を見て「此の折柄少しお控へあらせられては如何」と申上げられた。すると上人か又仰せられるには「汝は經釋を知らぬか」と。西阿上人は又「經釋はさうても、世間の機嫌を思ふばかりある」と申上げられた。此時聖人聲を激して仰せられたには、「たとひ我れ死刑に行はるとも、此の念佛ばかりは變へる事が出來ぬ。云云」と。此の御樣子を見奉つた御弟子達、皆涙を流して隨喜せぬ者は無かつたと申す事てあります。讃岐國鹽飽の莊は、關白月輪兼實公の地行所てある所から、上人は其處に居をお定めなされて、其の領主をはじめ、近國遠郡の上下、傍莊隣鄉の男

女群衆して、世尊の如くに歸依し奉つたと申す事てある。其後、信空上人—信空上人は聖覺法印や親鸞聖人と共に、法然上人の撰擇本願念佛の眞意を得給ひた一人てある。其信空上人は、承久の亂が起つて、上皇をはじめ、法然上人其他を罪した方々が、凡て其厄にかゝられたを見て、先言違はず、因果おそるべしと言つてお出になります。

又親鸞聖人は初め配所越後國府にお出になつたが、敕免の後は、更に常陸に越して、偏鄙の群類を化益下された。今日講話の初に申した『信卷』別序の「眞心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり」の御意は、此の次ぎにお話致す積りてありますが、聖人の御眼には、此の御流罪も何も彼も一事として、大聖矜哀の善巧ならざるは無かつたのてあります。聖人が御流罪を「是れ猶ほ師敎の恩致なり」とお喜びなされたは既に度々申す通りてある。又聖人が如何に法然上人の撰擇本願の御化導をお喜びなされしかは、『敎行信證』後序を見ると、其の御心が實に能く表はれて居るのてあります。

撰擇本願念佛集は、禪定博陸（月輪殿兼實法名圓昭）の敎命に依つて、選集せしめ給ふ所なり。眞宗の簡要、念佛の奧義斯に攝在せり、見る者諭り易し。誠に是れ希有最勝の華文、無上甚深の寶典なり。年を摎り日を涉り、其の敎誨を蒙るの人千萬なりと雖、親と云ひ　疎と云ひ、此の見寫を獲るの徒、甚以て難し。爾るに既に製作を書寫し、眞影を圖畫す。是れ專念正業の德なり、是れ決定往生の徵なり。仍て悲喜の涙を抑えて由來の緣を註す。慶ばしき哉、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如來の矜哀を知りて、良に師敎の恩厚を仰ぐ。慶喜彌々至り、至孝彌々重し。玆に因て眞宗の詮を鈔し、淨土の要を撫ふ。唯佛恩の深きを念じて、人倫の嘲を恥ちず。若し斯の書を見聞せん者は、信順を因と爲し、疑謗を緣と爲し、信樂を願力に彰はし、妙果を安養に顯はさん。安樂集に云はく、眞言を採り集めて、往益を助修せしむ。何となれば、前に生る者は後を導き、後に生るゝ者は前を訪ひ、連續无窮にして願はくば休止せしめざらんことを。無邊の衆生海を度せんが爲なりと。爾れば末代の道俗、仰きて信敎す可きなり。知る可し、華嚴經の偈に言ふが如し。若し菩薩種々の行を修行するを見て、善不善の心を起す有りとも　菩薩は皆攝取すと。今日は、昨日見せて貰ひたる『選擇集』及『七箇條起請文』の原本を拜見して、親鸞聖人が法然上人の選擇本願を喜ばれた當時を想ひ起し、聊か選擇の願心の佛意をお話致した次第てあります。此の次ぎには大聖矜哀の善巧の眞味をお話し致さうと思ひます。南無阿彌陀佛。々々々々々々。

夏期傳道日割

▲六月三十日ヨリ七月七日マデ　高松讃岐佛敎會
▲七月八日ヨリ十五日マデ　播州桃保郡、明石、江州、歸寺
▲同十六日ヨリ十九日マデ　東京大日本佛敎青年會講習會及日曜講話
▲同二十日ヨリ三十一日マデ　廣嶋講習會及郡部
▲八月一日ヨリ六日マデ　姫路佛敎夏期講習會
▲同七日ヨリ十日マデ　長濱大谷會講習會
▲同十三日（花卷）十六日ヨリ已後　小樽講習會、札幌、岩見澤、函館、岩内、旭川、碧海、弘前、秋田、地方、若松、求道會
▲九月上旬ヨリ中旬マデ

告白

故中村、長谷部兩候補生の遺簡

松島軍艦に乘じて遠洋航海の途に上りし、少將候補生中村吾一君、同長谷部連三君のことは、本誌本年第二號時報欄に掲げたるが如し、殊に中村吾一君の告白は、多大の光明を我等に與へられ、之がため入信歡喜の人となられし同胞も少からざる也。此告白は、予の言に隨ひ、同君出立の前宵、殆んど徹夜して認められたるものなり。今にして之を思ふ。實に同君が我等に對する遺言たりし也。實に中村、長谷部の兩君は、信仰の題面かあらはせるの人、中村君は經驗の確信如來の慈光に悅浴して、遲徹滯る所なく、其所信を斷行直言して傍に人なきが如し。長谷部君其人に誤解さるゝを戒む。長谷部君情濃かに、靈密に、時として法を喜びて涙頭さめ〳〵として泣く。中村君人に笑はるゝを戒む。此の如くにして印度釋尊の靈場に詣し、御風沐雨遠洋航海の渦中を終へ、遂に諸君に相見ゆる近きにあらんとす。四月三十日曉澎湖島馬公港頭母艦と共に流然として逝く。想ひ見る、其瞬間兩君は今や正に往生淨土の本懷を遂ぐるを喜び、知らず識らず念佛口に衝きて出でしか、嗚呼悲哉。予本年傳道して豐前添田井上順祥氏方にありて法を說く、中村君の檀那寺也。是實に三月二十三日、君が入寂一週日前也。叔京後五月二十一日予兩君の靈柩を新橋停車場に迎へ、翌日青山齋場に於ける海軍葬式に會す。嘗て求道學舍より直に新橋停車場に向て出發せられたる中村君の靈柩は、再び實兄中村松太郎君によりて、求道學舍に安置せられしも實に不可思議の因緣也。日曜講話席上、兩君追悼の講話をなし且つ佛前に誦經して慈謝の誠を捧ぐ。中村松太郎君及び長谷部君母公亦參列せらる。今亦兩君横須賀出立の際、予に贈られし肖像を掲げ、及び其遺簡を錄して同胞諸氏と共に、同一念佛の一道を仰がんとす。兩君今や如來淨華の胚衆として、正覺華中我等を照覽したまふべし。南無阿彌陀佛。

常觀識

追々と寒氣もひどくなつて行きますが、祖父樣には何の御障もなう御念佛なされ居られます事かと、遙にうれしう思ふて居ます。私も御蔭にて愈々近き中に卒業が出來る事となりましたから、御安心なさつて下さりませ。

祖父樣には、もう八十の坂をこし、嘸々何かと御不自由の事ばかりで、此の世にたのしみもありますまいけれど、佛樣の大慈悲の下に、御念佛あそばされるので御座いますから、誠に結構な仕合のよいのであります。

彼の御文章は、能くとぢて　表紙の字は筑波と申す私の爲には親兄弟について恩の有る和尙樣に書いてもらいましたのですから、中々有難いのであります。そのつもりで朝夕御よみ下さい。

今日は筑波と云ふ和尙樣が、呉から船で　私共に說敎をされる爲めに來られましたから、一日御寺で和尙樣から有難い御話をきゝましたが、どー云ふ譯かいつもにもなく有難く、學校に歸つた後でも口の內で念佛をして居ります。誠にみだの御なさけと云ふものは不思議なもので、苦しい時程多く味のあるものであります。まだ私などは信仰の門に一足入つたばかりで、何も知りませんけれども、家の人皆、母樣も、姉樣も、ほんとうに心から信仰して少しでも淺間しい心を起さずに居て下さつたら、屹度家の內は春風の吹く樣にたのしいもので有らうと思ひます。ドーゾ家內一同深く彌陀の御慈悲を戴き度いものです。

祖父樣　母上樣　姉上樣

江田島にて　吾　一

○

私の信心事は兄さんより御聞被下、御喜びの由私も誠に嬉しく思ひます。初め軍艦に乘せられ、荒き海の波は我が住み家と心得、少しの間とても佛樣の御事は忘れませねども、玄海灘から眺見の海の間は、船によいまして皆苦しまぬものは有りませんでした。こんな時には船頭さんもつらいものです。其の後二日間航海しましたれど幸ひ元氣で少もつらく思ひませんでしたけれども、氣持は惡く、一日も早く陸の上に上かりたうて堪りません。愈々昨日晝の三時に舞鶴に着きました時は、吾も人も喜はぬものは有りません。今日は朝から船を出て陸上を歩き種々と陸上の面白いものを見たり、キレイな家でウマイ夕食の御馳走になり、ほんとうに面白く暮しました。港に着きさへすれば、御上の御親切て吾共の爲に何でも造つて置いて下さるのですから難有ものです。コンナツマラヌ私か、ドーしてコノヨーにもてなされるかと思へば、嬉しさ身に餘りて、ドウしても　天子樣の爲め、　御國の爲めに、身を粉にしても働かねばならぬと思ひます。海軍程好きな仕事は又たと世の中にないと思ひます。

吾　一

祖父樣　母樣　姉樣

○

小生は長谷部兄の心の上の友達にて、愚鈍至極の煩悶多き青年に有之候處、江田島の學舍を別れし數日前、御先生の信仰之實驗を拜讀いたし、百考千思苦悶の末、佛天の偉大なるに打ち驚き、靈感湧起し爾來念佛いたさぬ日は無之き次第に候。時々天にも昇る歡喜も相起り候得共、省れば滿身愧しき罪に蔽はれ、念佛する身として情なく候。斯る折御先生の許にて佛陀の御敎を御聞かせ被下候はゞ、來らんとする遠洋航海も心嬉れしくのぼる事を得べしと相信じ居候。就ては元日より六日間は休暇に候間、友は皆母を見舞ひ東都に遊ぶ。その中に獨り船に止まり佛書を拜讀せんか、或は誠に々々あつかましき云ひ草なから、六日間を御先生と起居を共にする事叶ひなば上京せんか、二ッの中一ッを撰ばんと考へ居り候。何事も如來樣の御指導に候得共、忙はしき先生の御書面に依て一決いたし度存候間、恐れ〳〵愚札進呈いたし候。謹告。

十二月二十八日夜　福岡縣門前國人　粗暴なる　吾　一

近角先生樣

○

母上樣、今般東京にてよき坊樣にあいまして、又一層信心を深め毎日唱名念佛せさる日はなく、ねてもさめても佛樣の御恩を忘るゝ事は出來ません。海の上で如何につらひ事が有ましても、佛樣か御たすけ下さるから少しも心配する事は入らず、誠にたのしく日暮をさして頂く事が出來ます。是れと申すも私か信心の厚き祖父母、母上の家に生まれし仕合にて、御恩の深い事もシミジミ感せられました。愈明日は日本の海を離れ、七ヶ月程見ぬ外國に行くのですが、佛樣も一所に來て下さるから、何にも心配はいりません。

夏には久し振りに歸國いたし、緩る〳〵念佛話仕る可く待ち居候。死なれし祖母樣も、嘸かし、草葉のかげから私の事をよろこんで下さつて居られる事てしよう。

中村吾一

祖父樣　母上樣

○

新橋の茶店で御別れ申しましてから、毎日〳〵漫々たる海原に漂ひ、時々母國の山影を雲間に眺め、無限の感慨に沈みましたけれど、今日は琉球から二百里も離れた大洋に居るので、山の樣な波に搖られ、更に眼を遮るべきものもなく、誠に戀しくなつかしく、あなた樣の事ばかり、思案して居ます。乘艦以來、忙はしいのと、が、わ、の人か無信仰の若者ばかりて胸を開いて語る折もないので、稍東京の喜びは薄らきた樣てすけれど、佛樣はいくら私が忘れても、常に有難い御情を以て私を保護して下さるから、少しも心配する事は入りません。あなた樣に御まみえいたしました當時は、實に愉快て、天にも昇る心地して、只々佛天の不可思議なる有樣は氣も狂ふ程難有くありましたれど、乘艦以來、無信仰者はかりの中に居て、淺ましい心を見るにつけ、又波風の爲めに身體綿の如くに勞れ、氣分勝れぬ樣になりました今日、左樣愉快にも思ひません。ひたすら香港に着いて、陸地を踏むのを樂にして居ます。然し何事も皆如來の御導て、苦勞をさして後て又た、無上の樂天地に遊はして頂く事を思へば、ホントウに、有難くなります。

私の艦に兄弟よりも尙懷しき信仰上の友が一所に乘つて居ます故、朝夕仕事のことや、人心の淺間しい事など包み隱さず二人て語り合ひ、共に佛恩の無限なるに歡泣しては、南無阿彌陀佛を唱へて、苦しく淋しい長の航海中も、佛恩報謝か出來ます。此んな二人と居ない親友と乘り合したのも、一重に佛陀の御情と難有く感謝して居ます。

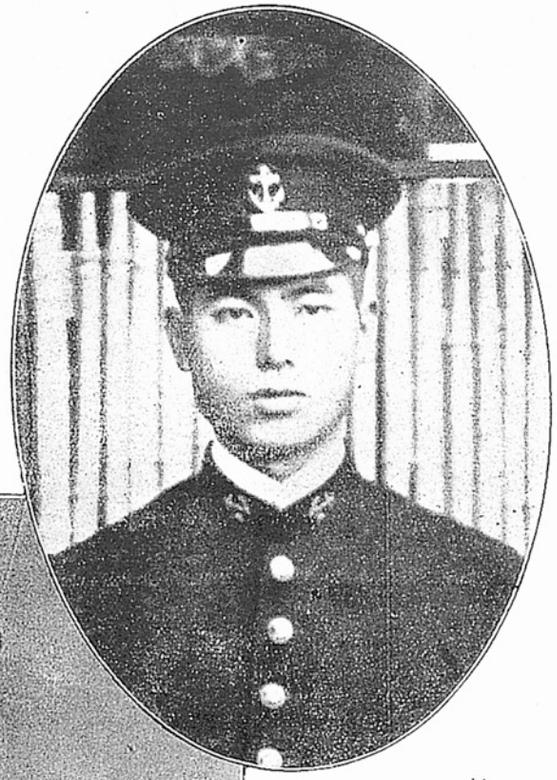
近頃まだ、嬉れしい、難有と云ふ樣な御氣持にはなられませんか、なられんのも無理は御座りません。誰ても一朝一夕て佛天に昇る事は六つかしう存ますが、難有くても難有くなくても宜しいから、念佛さへなさつて居られる中には、何時か御光明を拜する事か出來ますから、決して御急きなさるには及びません。只た恐れるのは、あまり、分らぬので佛も神も有るものかと、燒氣を出してしまつた日には、それまての事てすから、餘程氣を長く御持ち下さい。

二月一日　於支那海航海中　吾一

敎の上の母上樣御許に

○

航海中は隨分酷ひ目に逢ひまして、歡喜の薄らく樣な時も澤山有りましたけれど、是れ皆佛樣が御試驗をあそばすので決して苦める譯てはなく、是れ位の苦勞をしても御前は未だ難有と思ふかと、頭の上ておうせられる樣て、如何なるときも念佛の出ぬときは有りませなんだが東京にて御目にかゝりし折の如き愉快な日も有りませんてした。九日目に香港に着しました處が、案に相違して銀座も叶はぬ大厦高樓がならんて、浦の巖山の綠樹の間に西洋館か三々五々建つて居るまては驚きませんけれど、山の絶頂に大きな、練瓦造が巍然とし



如來大悲の恩德は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩德も
ほねをくだきても謝すべし

松島艦殉難少尉候補生
故　長谷部運三君

同　故　中村吾一君

如來大悲の恩德は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩德も
ほねをくだきても謝すべし

松島艦殉難少尉候補生
故 長谷部運三君

同故 中村吾一君

て霧に包まれて居る景色など、到底見ぬ人には想像もつきません。私は初めて見る香港の景色に蕩けてしまいました。翌日愈上陸して、トレーウエーて、昨日艦上から眺めました山の宮殿まて昇りますと、霧はかかつて居ましたが、セメントで卷き上げた廣い道路か山の峯を沿ふて居ます。

前面は香港の市街から支那大陸の禿山がスーウト霧中に包まれて、後方は大平洋が薄く光て居ます。私は此んな立派な道を獨て歩くのが惜い樣な氣がしました。然し佛樣の御作りになつた道といふ事に氣がつきました所、俄に念佛が口に出て參りました。其れから公園とか、市中とか、是れは面白いと云ふときは早速念佛をして能く私をこんな處まて御案内して下さつた事を御禮申ました。

昨日は日本人會から招待され非常に歡待されまして、是れも嬉しさ身に染み渡ましたが、中にも軍樂隊が席上に見へて居ました。どふいふ譯か樂士は皆印度人ばかりて、私は音樂の音に聞きとれ、何心なく黑き顔に眼をキラ〳〵光らして如何にも無智無能らしく、一人の西洋人に指揮せられて居るを視まして、此んな可愛想な、落ぶれた黑坊の先祖に、釋尊と云ふ一大哲學者が出たかと思ふと、丁度彼等の顔が御釋迦樣に生寫の樣に似て居る樣て、非常な尊敬と慈悲の心が叢々と浮び出て、是れも念佛て抑へました。

今日は待ちに待つたる郵便か日本から着ましたので、候補生二同大喜びて、受取ました。其中に私のも有まして、初めに讀だのか未だ御目にかゝりませんが、同じ舟の友達長谷部の妹さんから私への手紙て、愈々求道の心が起つたとの御禮狀——私は半分讀んて嬉しくて〳〵堪りませんてしたが、其れから四時間當直に立つて、今ハンモックに飛び乘り電氣の光て、是れも亦た見ざる道友の手紙を拜見いたしました處が、今までの嬉びが又た二倍になりまして、胸と腹との間をクスクラレる程嬉しく、寢ても寢る氣になりませんから、飛び下りまして、先生へ遙に心中を察して戴く譯てあります。

御話し申度い事が澤山あります。歸國の上は一週間位は御話て持ち切りてしやうと思ひますが、ドンナ事ても私は佛敎の立ち場から見る事の出來る樣な仕合せ者にして戴きました。念佛は私の新生命て有ますから、死ても忘れやいたしません。是れからまた〳〵日本から遠く南の方に行くのてすけれど、佛樣は千萬里の異境の空まて、私を守護する爲めに付て來て下さるから、一寸も心配は入らないと存じます。

時に先生の御手紙を頂戴したいと思ふけれど、先生は大變御多忙な御身の上て、世間には先生を待ておいての方か千人も萬人も有りますから、私に書く御暇か有れば、何卒そんな煩悶していらつしやる御方に上げて下さい。私は一寸も先生の御手紙は待ちません。其よりも、相見ぬ同胞の手紙を港に着た時拜見いたしますと、今日の樣によろこばして頂く事が出來ます。

信仰の餘瀝と御家族の御姿とは此上もない好きもので有ます。私の方も何かと多忙て、夜おそく、人の寢た後てないと、仲々心を落ち着て手紙など書く暇は有ません。昨晩は隣の友達と、ハンモックに寢たまゝ母の話をしましたれば、俄に母が戀しくなりまして、友も吾も起きて、長い手紙を母上に認

めました。

長谷部君も、愈〻冷静なる信仰を進めて居ます。怒濤舷に崩るゝ夕べ、二人甲板上て信仰談をいたします。世の中に二人となき親友と同居する事が出來たのも、全く御導に相違有りますまい。其れを思ふと又感謝てす。然しいくら信仰は高まつても、野卑下賤の根性は中々離れません。其れを思へは穴にも入り度き程耻しくて堪りませんけれど、「此の儘來い」と佛様は仰せられますから、ホントウに難有て〳〵御慈愛の深重なる事は念佛の外御返しの方法は有りません(下略)

二月七日夜十一時　　香港にて　吾　一

近角先生様

先生への手紙は求道にのせて下さつても少しも私は構ひません。只た或る人の御爲めになる様な事か出來ますなら此の上ない私の喜びて有ます。

○

謹て一筆申上候。御地は寒氣きびしき御事と遙に察し申候。先生並に御奥様には、いやまし御機嫌うるはしく渡らせられ候御事奉欣賀候。下て私儀御蔭様にて元氣御安心被下度候。偖て横須賀出港以來九日餘の日數にて、無事香港着、海上さほどのシケも御座なく、愉快の航海仕候。臺灣海峽にて6-7位の風烈しく、艦の動搖も二十五度位の事御座候。當時感喜あふれ、先生の「さんげろく」難有く拜し申候。

艦の航海中は中村と朝夕佛恩讃仰仕候。

本日サイゴンに向け出帆。とりいそき一筆申上候。

申上たき事山々有之候へ共、只今汽艇陸にまゐり候へば、惜しき筆をとめ申候。御自重專一に奉祈候。

二月八日　　長谷部運三

近角先生

○

「思へば勝手なものにて、愉快な折には念佛殊に難有候へ共九十一度もある熱帶に參れば、苦しさに歡喜あまり起らず、誠に〳〵我儘なるに驚入申候。

四日程前非常に變な考が浮び、自分の天職は宗教家にある如く思われ、先生方の御身分からやましくて堪らす相成候。長谷部君の忠告に依て、目下は至て冷静に相成候間御安心被下度候。

又た飛んでもなき事申上る様に候へ共、父の如き先生には何の遠慮もなく申上べく候。

室町伯爵家の皆様が、非常に數ならぬ吾が身をいたわり被下、三人の坊ちやんが弟て有る如く思われ、愛情溢れ、航海中の日記を忙しい中から長々と認め送り、聊か御恩返しいたさんと云ふのが起りにて、今日にては五十頁位に相成候。勿論文章は成つて居らねど　候補生の眞情を穿ち居る様思はれ、若し此れ程愉快な海上生活の一面を、天下の少年に知らせたら幾分か海軍の志想を少年の心に吹き込む事か出來るかも知れぬ、さあれば海軍の御爲めになると考へ、先日來此を巖谷小波先生か、押川先生か、將た江見水蔭先生に直して、いたゞかうかと種々と思案をいたし、今ハンモックに入り隣の友に話し候處、露伴と云つて「天うつ波」の著者は、餘程佛教に傾いて居る御方だと云ふ事を語られ候間、露伴先生が直に又た吾が兄てある様に感せられ、御交際いたしたくて堪らず候。

本遠洋航海は總て佛天より眺め申候間、記事に己が信仰の感、慨を加へて、後で露伴先生に直して、著書(實に耻しいけれど)として、同胞の方へ御分ちいたし度候。如何なるものに候哉、而して露伴先生を御存知に候哉、御存知なら御照介を御願申上候。

以上つまらぬ事なれど一應御相談申上候。

西貢は海から四十浬も上の河岸にて、暑いばかりにて候へ共、日本軍艦か珍らしいと見へ、河岸に立ち見物する異人山の如くに候。又たインヴイテーションも有る様に候間、又た愉快になれは、歡喜溢る可く候。誠に勝手な信者に御座候。(以下略)

二月十四日夜　　吾　一

近角先生様

○

昨夜御母上様より長き御手紙頂きしと夢み、本日こそは御便りに接し奉らんと存候處、九時近く日章旗の巨艦徐々波をけりて入港、とかく日本懐しき目には早速望遠鏡にて船名見申候處備後丸に候。正午手紙とりに郵便局にまゐり、歸艦、果して御母上様の御手紙、山田よりの手紙、御母上様の御はかき、すゞ子よりの二葉のはかき、三枝子よりの手紙、學校の友人よりの手紙、近角先生よりの求道。大豊年と悦び申候。

御手紙繰返し〳〵拜讀仕候。

嚴寒の候先々御さげんうるはしく渡らせられ、何よりよろこばしく、特に變らせられざる佛陀、慈光に浴し玉ふ御事、難有くも尊き極みに存じ申候。

運三儀

不相替元氣、風吹かば吹け、波高からば高き時も、鏡の如き日も、暑き時も、暖き佛陀の御懐にありて、よろこびつゝ船務をとり申居候。特に道の兄たる中村か、日夜ニコ〳〵慈愛溢るゝ喜びを語りきかせ、小生のみかは遠く御母上様はじめ兄上姉上妹の上迄も色々と申され居候。實に中村は一大變革仕り候。之とても佛智佛力の只々不可思議と申さんか、有難しと申さんか、實に天にも地にもなき親友にて、毎日誘導しくれ、よきに導き、惡を戒めくれ候。御序の時一筆御したゝめ被下度願上候。

近角先生御著の「信仰の餘瀝」第一にある信仰の同朋、つく〳〵思ひ當り實に〳〵佛光のやどりし人ほど、有難くも尊く、力になるものはこれ無く候。

一點のかくす處なく苦樂を共に致居候。之れ限りなき佛陀の運三をあわれみ、同じ船にのせ玉ひし事と深く鳴謝奉る處に候。互に心を知る友ほどうれしきもの無之候。(中略)

横濱出帆の際玉りたる築波先生の御狀の如き、句々佛陀の御聲と拜見して、ハラ〳〵落涙。爾來海上にて苦しき時もうれしき時も、之の御狀によりて、よろこばして頂く事しば〳〵に御坐候。佛陀々々とて、決して遠き處に在すわけては御坐なく、遠くして近く認められ候。實に无碍盡十方の光明は、近く胸にかゞやき候。此の時は、御母上様も御兄姉様も近く小生の傍にましまし、宇宙之れ我の感なくんはあらず候。虫の音近く窓下に(實際に船に居ます)聞え、思を萬里の故山にはしらする人の心は、如何計りかと氣の毒に御坐候

二十四日夜　　運三

御母上様御膝下

○

運三君の御賢母様、蔭ては毎日の様に御噂さはかりして居ますけれど、不性だもんだから今日書かう明日書かうて濟みませんでしたが、今日は愈堪りかね一寸御詫を申上ます。

御母上様の御心は鏡を見る様に私には明つて居ます。今更佛様の事を云ふのも野暮ですから申上ませんけれど、承れば御姉上様方がまだ自分の力を頼んで、ほんとうに信心遊されない模様て、私は他人ながら自身の姉様のやうに思はれて、御氣の毒て仕方がありません。それても御心配が御座りません内は、それてもよいかも知れませぬど、不幸が幾らもせめ寄せて來る時は、佛様にたよらないと苦味が大變てす。然し何とはなしから申上ても、時機の到來するのを待つより外に手のつけ様もありません。何れ大慈大悲の佛は、よき導を授け花の如き信仰の長谷部家を造らせ玉ふ事と、先の事のみ樂みにして待て居ます。左様なら。

二月二十八日午後七時半　新嘉坡よりペナンに向ふ濟中

中村吾一

長谷部様

夕方ボートを下し帆をかけて、靜な波上を乘りまわしました。青靄あり、夕日雲に映じ五彩燦爛、遠く新嘉坡の電光をなかめ、清風吹き來つて、袂をゆるかせ、熱帶の夕涼は誠によろしく、晝間の暑さも忘られます。右一寸一筆。

運三君が私に盡す親切は仲々親にも盡せぬ程てありま す。運三君の如き子を持つた母の幸は如何ばかりか、又た私も母一人ですから、日本一の親孝行者になる積りてあります。

○

先生も御姉上様も、熊本の御老母も御まめて御喜びの事と私も喜んて居ます。こうして雲山千里をかけ隔て、雜務雜役に服して居ますけれど、一日として求道學舍の事は忘れた事はありません。日曜の朝には所々方々の同行が、學舍の内て打集ひ、共に〳〵御法義を喜ばれて、ゐらつしやる御姿、室内の模様が目の先にちらついて、私も一所に參り度くてしかたがありません。又たどんな御方が見へて居られるてあろーかと思へば、皆様の御顔が一目拜見したくて堪りません。ても私の船は日一日と釋尊の御產れ遊されたセイロン島に近づいて行きますから、又た愉快てす。多分如來様は私の手を取て、印度の方に御案内して下さるのてしよう。

如來様はドーシテ私ばかり此んなに可愛て下さつて、世の中に澤山苦んて、セチカライ日暮をして居られる同胞には、可愛かり方が足らぬ様に思はれまして、如來様に御目にかゝつて不足か云つて見たう御座ります。さりながら佛の光は少しも不公平かないけれど、心に自力の殘つて居る中は、頭が白くなつても、光つても、決して解るものてはないと申ますから、仕方もない事てす。其れにしても可愛想なものてすね。雜誌求道は意外に早く御送り被下、自分の書たのばかり毎日繰返し拜見して、うれし涙にくれて居ます。私は自分が書いたのでなくつて、佛様か私の手を取つて書かせたと思へば、

自分の文を自分か拜讀いたします。

又た三人（一人は江田島にいます）とない親友長谷部君と、同し乘り込みになつたので、又となき私の仕合せて、どれ程仲好く二人か暮して居るかは御想像にまかせます。私か喜ぶ時は彼れも喜び、長谷部が喜べは私も躍り上かつてうれしかり、此んな愉快な事はありません。先日の朝など長谷部が僕に用か有ると云ふから、甲板に出て行くと　イキナリ泣き出してしまいました。僕は何の事だかサッパリ分りません、長谷部が云ふには「吾を見た様な惡人を、ドーシて此んなに佛陀は可愛がつて呉れるかと思へば、難有て〳〵泣かすに居られんと申しました。私は人か居るから其んな眞似をするな、難有くて堪らぬ事は御同様だ、いくら御禮を申しても、申し盡すと云ふ事はないから、一とまとめにして「ナムアミダブツ」と云ふ外はないのではないかと申しました。こんな可笑しい事はありません。昨日は又た巢鴨の眞宗大學生小林一道と申さるゝ御方が、私の告白文を御讀みになつて、難有かつたと云つて御禮の手紙を拜見いたしましたから、こんな御禮を受くるものは吾一てはない、御阿彌陀様だと云つて、船首に立ち念佛はかりいたしました。近頃私の念佛は少し毛色かちがつて來て、『ドーゾ私の大親よ、私ばかり可愛がらずと、世界の人を一人も殘らぬ様に救ふて下さい』と、心の中て御願ひいたします。難有くて念佛ばかりして、自分の役目をスッポカス事が多〳〵て、一日の中には何度人に御詫をするか知れません。之れには實に閉口してゐますよ。

新嘉坡よりペナンに向ふ途中　中村吾一

先生の御令弟様

日曜の午前九時頃には、私は長谷部と兩人にて、御宅に集つて居られる方が、皆な先生の御言葉か胸に落ちるように念佛して居ます。

○

椰子樹茂るペナンより一筆申上奉り候。

御地は餘寒尙嚴しき御事と遙に奉察候。されど先生には變らせられざる大悲の中に、暖き日を送らせ、日夜人々を御導き遊はされ候御事、尊くも有難き極みど、遠く中村君と日々御噂さ申奉居候。下て私儀御蔭様にて日一日と如來様の御救濟に、愉快なる職務につき申居候間、乍憚御安神被下度候。

如何に母國を離るゝこと遠く候とも、渺茫たる海洋に何の變も御座なく、廣き虛空に北斗のちがひをも見出されず候。かく大悲の御親は常に私を抱かせ玉ひ候へは、乘れる船は大悲の船　吹く風は大悲の風　どこを叩きても虛僞傲慢自ら呆らるる身を、かくほど迄に御寵愛遊はさるゝかを思ふ刹那、萬物皆感喜の種ならざるはなく、念佛だけにては相濟まざる心持致され候。怒濤舷をうち候時も、鏡の如き水を滑り候時も、念佛にてよろこびを頂き居候。

中村君と同じ室にありて、日々西方　釋尊の跡に近き候事、只々佛陀の御みちびきと二人してよろこび申居候。

一人よろこべは二人よろこび、二人よろこべは三人よろこぶ、一人は親鸞なりとの御言葉、つく〳〵思當り候。私のよろこび候時は中村君までよろこびくれ候。遠く先生もおよろこ

び下さるゝ御事は、目に見すかされて、いよ〳〵よろこばれ申候。かくして宇宙悉くよろこびくだされ候へば、私より宇宙に對する時、萬物皆感喜の種に候。されど煩惱の雲時々襲ひ、動もすれば淺間しき身になり、愈〻以てあされ果て申候と共に有難き事に候。

二月の求道新嘉坡にて拜受繰返し拜讀仕候。

信仰問題の急所一々胸にひゞき、胸中悉く御訓戒によりて感喜々々に御座候。幾萬の求道者、定めし此の御訓戒身にしみうれし涙にくるゝもの多き御事と　私迄よろはせて頂き申て候　自己の罪惡、常沒常流轉の凡夫と知らずして、徒に感喜をあこかれ、切に佛陀直接の接觸を實驗せんと悶えし事は、私の昨秋の實驗したることに御座候へば、實に〳〵一〻胸に響き申候。あらゆる苦痛も愚痴も、佛陀の光明に照されし一刹那、悉く美化仕り、勿躰なさと有難さの外に、私の心中上る言葉御座なく候。

新嘉坡にて私の從妹より手紙を受取り、非常に佛陀の御慈悲をよろこび申候。從妹は未だ何の不足もなく、父母の下兄弟と睦しく育ち候へ共、何處となく他の兄弟と性を異にし、淋しさを感すること強く、如何も可愛想に存じ候　未だ御慈悲を說くだけの機もなく候へば、横須賀出港の際先生の「信仰の餘瀝」「懺悔錄」佐々木先生の「救濟觀」「佛敎之眞隨」を送り申候處、大によろこびつら〳〵自己の淺間しさを覺り候模樣　紙面に躍如として、見え申候。併しなか〳〵に佛陀直接の御光に浴することは遠きことと存候。

四月上旬には上京仕り先生を御訪ねすると申越候。何卒よろしく御みちびきのほど奉願上候。

誰も同じ御慈悲の中にありながら之を知らず、醉生夢死に了るほど可愛想なるものは御座なく候。

明日本地出帆、ツランコアリーに向ひ申候。

乘る船は大悲の御船、吹く風は大悲の風、快何物か之に過きんとよろこび居候。

先は謹みて御禮申上奉候。尙從妹儀よろしく御みちびきのほど願上け奉り候。　南無阿彌陀佛。

三月四日　　ペナンにて　　運三拜

近角先生

○

御母上樣には益御機嫌うるはしく渡らせられ候御事と、遙に奉賀候。下て小生不相變、御慈悲の下られしく日暮し、日一日と、佛智不思議の御力を拜し、難有き極み、何よりの幸と喜び居申候

去る二日ペナンに無事着仕候。至つて淋しき土地らしく、未だ上陸仕らず候へども、さしたる處も御坐なき樣子、植物園か見物によき處らしく、併し四哩も有之、時間は僅々四時間位にては見物出來ぬ事とあきらめ申候　是よりコロンボに近く相成候は、何となく如來の御導の事と中村と話しよろこび居申候。

本日は暫くにて築波先生に筆とり申すべく候。今になり先生の御言葉、中々に味ふかく合點まゐり、よろこぶ事屢〻に候。誠とに〳〵佛樣の御慈悲疑はれず候。多くの信者なるものが、只念佛となへ寺まゐりするのみの樣に思ふは、誠に憐なる信者、確と佛樣の御懷にあるを信せられねば、却て無信心者よりは氣の毒に候。貞子によく〳〵御話し被下度　また御序もあらば八幡のすゞ子にも御話し被下度候。

先達手、シンガポールにては、日本の旅屋に風呂に入らんとてまゐり候處、丸山祐吉氏の弟御と會ひ申て候。來る五日コロンボに向け出帆、船は之れ大慈の船、風は之れ大慈の風、身は如來の懷、無二の親友中村は之れ佛天の人　誠に愉快至極に候　賢古

運三

御母上樣御前に

○

御姉上樣には御機嫌よく渡らせられ候御事と賀し奉り候。小生誠にうれしき航海仕り居候間　御案じ被下間敷候。(中略)益〻佛陀の御慈悲御讃仰の御事と存じ候。身を三省、四省して、つく〳〵心中を解剖すればするほど罪ふかきを思はれ候。されど〳〵不語の佛樣、此の上罪つくりて慈ある御親に御心配かけ申されず候。何卒御相談願上候。

運三

御姉上樣

○

昨日長谷部君と一所にカンディに參見いたしました。カンディへは御參拜被遊た事と存じますから、詳い事は申上ませんが、佛牙の納めて有る堂の前に行つたら、思はず腰と頭が下つて、私は霧中になつて合掌しました。鴻大なる御恩を御禮申上ました處、澤山な土人か周圍にたかつて、非常に喜んで經文の書た芭蕉の葉を土產にくれました。たとへ言葉の分らぬ黑坊でも、結び付けられたる如來の慈悲は同じです。彼等が親切を思ひ出しては、南――佛――。

三月二十一日　　印度錫蘭島コロンボ軍艦松島　　中村吾一

近角先生

○

ペナンを出ました翌日から、血膜炎で目が大困り、とう〳〵此港に入るまで寢ました。皆か大に働いてるのに、獨りハンモックに寢てゐて、實に氣の毒にもあり、殘念でした。コロンボに入港したのか十七日の午前、(十七日に起きました)是れから夜の當直や、夜の航海計算でまた惡くなるかも知れませんか、歸國したら充分直さなければならんかと思ひます。

目下北東モンスーンか、南西モンスーンに變る頃で、風か一番弱く、それで名にし負ふ印度洋も、まるで鏡の如くでした。

コロンボに至る間が一番美い海でした。十一日には亡兄の日て、仰臥唯念佛しました。コロンボは有名な築港、立派なものです。金の力も偉大なもの、人の力も盛大なものですと驚きました。

釋尊の修業された處は「キャンディ」と申しまして、汽車で四時間かゝります。金も大分かゝりますが、切角來てまたと云ふことも叶ふまいと、出掛けました。一昨日(二十日)朝に出て夕に歸りました。汽車の中て立派僧侶かゐました。釋尊もこ

んな風だつたろーと思ひました。黄衣を卷いて、跣足で、シユロの葉で出來た傘を手にし、「ヒツ」を黄色の布で、つゝんでました。話しかけた處、英語が十分に話せないでだめでしたが、向ふでも話したかつたのか、黒奴の紳士を呼んで來ました。この若紳士中々ハイカラな男で、快活な面白い人でした。英語が達者で、この僧侶との話を英譯して聞かせました。色々日々の生活やなんかをきゝました。是等は歸國して、申上ましよう。日誌の一片となつてます。妻帶は決して、せんそうです。なまぐさも食はず、專ら菓子とか果物、穀物ばかりであるようです。「キアンディ」の半頃で下車しました。それから後は此の紳士との間に話の花が咲きました　キアンディについた時は十一時半　早速「クキーンスホテル」と云ふ此處の一等旅館に案内されて、中食をすませ、(二圓斗り)それから寺を參詣にまいりました。御約束の珠數よいものはありませんが求めました。

二時間斗りで二時の汽車で歸りました。此の汽車の後に借り切の列車がありましたが、大分きてからその窓から手を出して呼ぶので行つて見ましたら、中村が黒ん坊の包圍攻擊で困つてる處、停車すると乘りかえましたが、中村のまわりに一バイたかりました。ハイルと私の處に來て、英語は話せるかと云ひますから、そうだと云ふと、非常によろこんで、どうか、日本海の海戰の話をしてきかせろと云ふてさわぎたてる。その時は生徒で海上の戰はせんからと云へば、ても話をきいてるだろうから、それてイゝからと云ふので、已むなく考へ〳〵下手な英語で、ユル〳〵話し出しました　此の一行は日本でいへば、慶應義塾の生徒の樣で、みな上流の子弟、コロンボの學校にクリツケットのマツチに行くのだそうですバナヽ、ヤシ、ミカン等の籠を澤山あけて、どうか遠慮なく上つて下さいと云つて渡すから、勝手にとると云つて大分平げましたが、とても、二人やそこらで平げられんでした。隨分愉快でした。

二月二十二日　於コロンボ　運　三

皆々樣

○

謹みて申上げ奉候。御地は日にまし暖く相成申候御事と奉存候　先生にはいやまし御機嫌うるはしく、日夜、御誘導被遊候御事難有極みに御座候。私儀御蔭樣にて無事、昨日本港に入港申候間、乍憚御安心被下度候。本日求道拜受、難有御禮申上げ奉り候。溢るゝ慈光、よく〳〵拜讀し奉るをたのしみ申居候。

於マニラ　運　三

近角常觀先生

○

前略三月の求道は、バタビヤにて拜受いたし、時々拜誦、善き事澤山御聞かせ被下、何ども御禮の申上樣も無之候。就中福間樣の信仰には誠に敬服いたし申候。餘りの嬉れしさに他人事と思はれず、おこかましけれど別紙認め申候間、何卒御屆け被下度願上候。青梅の小林婦人よりは度々涙溢るゝ御

たまづさを拜見いたし、多大の御敎を受け申候。婦人より先生樣へ宜敷申上くれよとの事に候。又今日は小倉の去る婦人より求道を見て難有御手紙を拜見いたし、嬉れしくて〳〵堪り申さず候。何もかも皆私如き罪惡深重の身が爲せし業にあらず、皆々佛樣の御はからい事と存じ。暇さえ有れば艦首海風涼しき所に立ち、獨り念佛いたし、一人なりと多く此の樂天地に參られる樣祈り申候。申し度事のみなれど、用事あれば此にて擱筆いたすへく候。

日曜講話の有樣か、眼前にチラツキ、共に〳〵と思ふ心やるせなく候。をはり。

四月十一日　マニラ港より　中村吾一

常音道兄

只今よりベースボールマツチに招待せられ、出かける間際に有之候。愉快〳〵。

○

バタビヤからマニラに向ふ航海中、三月の求道雜誌で貴家の御事を拜見いたし、燃ゆるが如き、熱情抑えんとして、抑ふる能ず、幾度か日本の空を仰いで念佛を唱え、何とも云ひ樣のない感涙に咽びました。御尊父樣の如き七顚八倒の御苦痛中に在つても、佛樣の大慈光に浴する事か出來るとは、何と云ふ不思議な難有い事ではありませんか。又た御母上樣も御入信遊されたそうな、私は失敬なから、丁度自分の父母が信仰に入つて下さた樣に嬉しく、獨り膝をポン〳〵叩いて雲山千里の南方から喜んで居ります。實際飛び立つ樣に、たきつく樣に嬉しくて堪りません。

獲信之記を今夜拜見いたしまして、誠によき敎を受けました。私などは未だ〳〵不幸にして苦勞のしかたが足らぬと見え、信心決定の樂天地には屆きませんが、何れ絶えざる佛の慈悲に依て向上さしていたゞける事と心安く喜んで居ります。

誠にあつかましく、實は出狀を幾度か見合わせましたれど、佛陀の御手下には、皆樣は私の父てあり、母てあり、兄てありますから、遠慮なく拙筆を以て聊か所感をのべ貴家の爲め双手をあけて、御祝ひ申ます譯てあります。今頃は御父上は佛樣の御招に依つて、御旅立遊はされたかも知れんと存じます。然し何もかもあなたまかせてすから安心なものてありますね。初めての手紙に、餘りおこかましいから、此て止めます。嬉れしさのあまりに。

四月十七日夜十一時半　マニラ港松島　中村吾一

福間甲松道兄樣

○

御姉樣よ、難有御玉章本日落手いたし、御眞情心にしみ申候。二三四月の三ヶ月は釜中に在る如き熱帶地方に起居いたし、暑氣のはけしき事は非常にて身も骨も熔ける樣な時も折々にて、同乘員總て痩せ申候。小生の如きも本國にある時より、一貫五六百目減り申候へ共、精神の活動は常に此の熱氣に打ち勝ち。今や熱帶地方をぬけ出つる時と相成申候。斯る苦熱のちまたに有つても、片時も佛恩の鴻大を感せぬ時は無之、念佛を唱するに氣のむかぬなど申す事は寸刻も無之、誠に仕合者と喜び居候。何につけかにつけ思ふて愉快ならざる

事は一つとしてなき、此の有難き世の中に、姉様は未だ前世の罪業などと吾身の不幸をかこたれ居られ候摸様に候が、其れては佛様が自分の物になられぬ證據と存じ候。

自分の不幸が却てあべこべに嬉しく、天下一の仕合せ者と思はれる様になつてこそ、眞の信者と申す可く候。日々に御信念はいやましに御進み被遊れ、私も吾が事の如く喜悦いたし居候。私は姉様が一日も早く眞の信仰を得られる様にと、夜などは獨り暗き甲板の隅に立ち双手を合せ、天を仰いで佛様に御願をかけて居ますから、遠からず、まことの信者になられる事は信じて疑い申さず候。之れにても姉様はほんとうに飛び立つ様に喜ぶ事が出來ぬならば、姉上様の御熱心か足らぬのか、又は佛様は世の中に居らぬか、二ッに一ッに御座候。此度の事件は誠に驚きました。御覽なさい姉様がどうしても、信心が出來ぬものだから、佛様は手を替へ品を變へて苦を與へ、早く〳〵信仰が結べる様にして下さるてはありませんか。

姉上さへ信心か出來た曉には、必ず佛力が働いて家内圓滿福德限りなき御仕合者となられる事は、受け合て御坐ります。私も以前まて心配になつて堪らなんだ事件が、(家の事や身の上の事)一切うれしさの餘り、散つて消えてしまいました。其れを思ふと又た佛力の不思議に驚嘆せざるを得ません。なにもかも皆な佛陀の御指圖と安心感喜いたし居候。

四月十八日夜八時

吾一

道の上なる姉上様

(前略)去る十一日、先日御通知申上候通り、田川郡木城中村吾一道兄様の御遺宅を御訪問申上候　當區は二十戸餘の小部落に有之候。御令兄松太郎様は不在、御母堂出て迎へられ候。一應の御挨拶吊詞を述べ、佛前に禮拜、正信偈　和讃、御文章を拜讀致し、後中村道兄の告白を拜讀致し、今更なから胸迫り、感涙にむせび申候。御母堂様にも御落涙被遊兎〻佛前を去り難く、談、中村道兄生前の事に及び候。道兄六歳の時　父君と共に家の側にある山林に入り、父君樹木を切倒され候處、其一端自己の腹部に當り御負傷、其場に於て御落命被遊候由、其當時中村道兄は泣聲立て〻近傍の人を呼はれ、一家の人皆御集りに相成、今生の別れをおしみ、離杯をなして、逝去被遊候由、其當時此の悲慘の話し　私共幼少の折、耳に致し、今尚記臆致し居候。其後道兄の直の令兄は日露戰爭の時、遼陽にて負傷、大連にて逝去被遊　此度亦々不時の不幸、御母堂の悲み實に同情の至りに不堪候。私も人生之無常なる事、及び此無常なる人生なる故是を憐み給ひ、佛陀わさ〳〵此世に出てまし給ひ、我々を迎へ取り被下候事なれば、唯々御惠を欣ふ外無之候と、御なぐさめ申候。尚求道二號は令兄松太郎様へ御見せ被下、篤と御熟讀被下候様申置五時半過歸途に就き申候。何れ埋葬之節は御會葬申上る筈に御座候。

道兄の家庭に宛てたる絶筆爲念拜借　之を寫し持歸り申候此書管、最後の一節の如きは、御佛が特に私に訓誡を垂れ給ひ事と感じ難有感謝仕候。

印度錫蘭島にては汽車にて内地に入込み　釋迦の靈地な

るカヤンデイ町に遊び申候。當地は海岸を去る、七十二哩の山中、海拔千七百尺有余有之候間、丁度我か彦山に遊ぶ感有之候。何れ面白き事は萬々歸國の上に致す可く候。

渺茫十一日間の航海にて、南半球バタビヤ島に安着致し隨分面白く暮し申候。又た十日間の長航海にて、本日午後八時マニラ港に着し候。當地は米國領土に候。目下彼我の形勢ゴタツキ居候最中なれば、本艦隊にても大に用心致し候。此の次は臺灣のボーコ島に候に付　最早本國の領地に入り候間、氣候も大分涼しくなり、國人にも逢へる事なれば在船一同喜び居候。(中略)

月さんの(令妹の名の由)手紙に依れば、愚弟を郷里にては信心家の様にふれまわし居候由、至極結構なる事には候得共、御開山の仰にも「愚人と云はるとも、佛法信者と云はるゝな」と有之、自分から信心者振るは以ての外の心得ちかいなれば、家内の皆々様も其心にて決して信心なき外の人に、吾一が何の彼のと申如きは、却て佛の敎にそむき居る旨御申し聞かせ被下度候。

本艦隊歸國は七月末なれば、直に一週間問位休暇があるが、それが明かねば大方皆々様と御目に掛る事を得るには、本冬と相成可候。以上一寸御知らせ申上候。

四月十七日　米領ヒリピン群島呂宋マニラ港　吾一

御尊兄様

實に難有候。南無阿彌陀佛。(以下略)

五月十八日　福岡縣大牟田町　有田廣

嘆詠

勇士をとぶらふ

甲之

かさなる天地(ものつち)
波ゆりやまず、
はてなき海坂(うなさか)
行方へに光。
はかなき人の
力滅びぬ、
滅びの靜けさ
力は底ひに
沈みてふたゝび
波ゆりやまず。

中村、長谷部二氏を吊す

八風

勵建てし艦「松島」は勵建てむ益良丈夫を乘せて沈みぬ
事あらむ日なし待てりし益良夫は水づく屍となり果てにけり
海ゆかば水づく屍と誓ひけむ君とし思へばいよよかなしも
天地に普れき光仰ぎてし君にしあればます〳〵惜しも
海ゆみかば水づく屍と誓ひつゝ如何にか國を思ひけむかも
安きにも安からぬにも冒の根の長き船路を喜びにけむ
寄葉繁る夏の日またも相見むと云ひて立ちたる君し思ほゆ
木の蔭は暗く茂りぬ然れども再び逢はむすべもあらなく

時報

石見、九州傳道

感謝欄記載の如く三月二十五日より、四月九日に至る四拾五日間近角は石見九州に於ける同朋の熱誠なる歡待を受け、日夜大悲の慈光を讃仰し、法喜の間無事歸京したるは、誠に感謝に堪えざる所。殊に各地到る處信仰の盛んなる、同朋諸氏の渥き心情に浴したるは長く忘るゝ能はざる所なり。茲に謹みて其の厚恩を感謝し奉る。猶石見に於ける所感の一端は本號感謝欄に記載せり。九州方面に於る所感は、次號に之を誌す所あらん。

松本、高田、直江津傳道

豫て本誌時報欄に記載したる信州松本、寺田五三子百瀬八代子兩氏の發記にかゝる女子求道會は、同地多數有志の贊助を得て、彌々其の發開式を五月二十五日を以て擧行するに到り、近角は之れに參會したり。開場は同地神社の集會場を以て之に當て、會員は皆是れ同市の主なる婦人女學生にして、來會者は同市有力者各宗僧侶新聞記者青年學生等數百名。寺田女塾學生の唱歌、同氏の開會の趣意、同市女學校長の祝辭等あり。近角は「人生と信仰」に就きて一場の講話をなして閉會せり。同夜又同所に於て公開演說會を開き、近角は、實驗の信仰を說く。同地從來宗教不振の土地なれど、人生の風濤は遂に自覺の光を促し來る。其狀恰も第二の羽村と謂ふべし。翌日中學生の爲に日本精神上の發達に就きて講話し、其の夜有志茶話會を開き信仰上の質疑實驗につきて談話す。二十七日松本を出立して、越後高田上越婦人會の請により、同地本願寺に於て、開會、演題は選擇の願心にて、講話二席。翌日又大聖の祥哀に就きて、講話二席。同地從來法緣厚くして、同信の人々引きも切らず、來訪し給ひ、宿緣の深き有り難き極みなり。回顧せば一昨々年八月三十日當地淨興寺に參詣しつゝあるの時は恰も我が從弟の戰死したるの時なりき。本年は恰も母を伴ひ、信州善光寺に參詣し、又高田に於ける舊蹟を巡拜するを得たるは、法緣の餘德と感謝に堪えざる所あり。同夜金子大榮君等の數年間繼續せる洗心會に於て講話をなし、翌朝同君及横田常力君の嚮導により、母を奉じ腕車にて國府なる聖人流罪の御舊蹟を參拜す。先づ小丸山別院に詣し、聖人眞筆の小名號に覺如上人書添えの筆蹟を拜す。墨痕朦朧として文字磨滅せる處ありと雖も、筆力猛勁躍如として聖人の精神活現し、風雨七百年坐に聖人謫居の昔を偲ばしむ。向源寺住職及君上野君の案内により、五智如來の境内御草庵跡、及び養爺泉を拜し、向源寺に着し、聖人當時の眞影覺如上人の本願名號正定業以下十二句の讃文あるを拜し奉る。同寺に於て君等の精神講話會の爲に又一場の講和をし、聖人の御苦勞を追回し奉る。同夜信州辰野驛に一泊、二十九日夜歸京。

求道學舍第六回紀念日

六月一日は求道會紀念日なるを以て、例年の如く紀念の會合を催ふし、中庭に於て一同撮影の上、佛間に於て嚴に感謝を捧げ、歎異鈔を輪讀し、畢りて晩餐を共にし、歡語盡くる處を知らず、在地方學舍出身者に葉書を出し六年間の經過を回想して、佛天の冥祐偉大なるを感謝せり。殊に本年は和氣團々、其樂み融々として、慈光室に滿つるの慨ありしは、一入有り難く、唯遺憾なりしは昨年迄年々紀念日の主賓として來會せられし島田蕃根翁のあらざる事なりき。

（求道會館設立寄捨金受領人名は次號に掲載可致候）

第五版出來

清澤滿之多田鼎佐々木月樵曉烏敏著

精神主義

精神主義は苦みの谷をたどれる迷者、慰めの光明を認めたる歡喜の叫びなり。
精神主義は社會に苦み、自己に惱める人が、道びきの如來を信じたる安心の聲なり。
精神主義は宗教の記載なり、信仰の告白なり、救濟の發揮なり。
精神主義は事實の記載なり、經驗の懺悔なり、吾等の精神、狀態を有の儘に表白したるもの也。

金三十錢
郵稅四錢

伊藤證信今井昇道和田龍造著

偉人の言行

天上の月光草葉の露に宿るとき、そこに種々の光となる。絶對の靈光人格の上に降るとき、そこにさまゝ異彩を現す。本書は古今偉人の人格を透して佛陀の慈光を味むために、眞摯なる著者各自の所感をものせられたるもの、大聖釋尊、慧可禪師、ポリロ、孔夫子、バンヤン、親鸞聖人、王陽明、カーライル、道元禪師、道仁翁、トルストイ、蓮如上人、明慧上人、莊子等の偉人の高風本書の中に躍如たり。世の修養に志せる者本書を讀んで讃仰の質とせざるべからず。

假裝美本四六版四百頁
金五十五錢
郵稅六錢

精神界

六月號目次（本號二倍大）

如來……清澤滿之
現實の悲哀……（本誌）
警號三則……（本誌）
たのめとは我衷心の渴望に應ずるたまへる聲也……（本誌）
迫醒……佛領
恩の生活……井上圓了
無明……黑部慈
現代黑暗思想の要求……井上秀
道徳……烏
懷古の趣……野口
香樹院語錄……嘆
他力の繩……田
見てありぬ……武田
兩極理想の調和者……多田
海龍王寺にて……薄田泣菫
僧侶……金子大榮
澤先生談片……田中知
澤先生……田
草口記……柳田
容……多
澤先生と予……一
我は貧しき市民也……柏原祐
救の花輪……秋
依藤の信念……加藤
岡崎物語……山
絕……田
確信の生活……坂
草……多
草の雨……和
沈……安
勇の性格……非
彌陀偈和讃……藤
證……田
偽和讃註釋……洲
子……佐
澤先生に對する父より……々木
澤先生に對する回顧……月
熊本たより……見
中道……安
花……田
小き……井
境を……覺
ふるに非ず……廣
佐太郎の話……賢
松韻……吉
眞異鈔を讀む……田
曉……鍋
自督帳……福
我に影向したまへる先師……蘇
東京たより……沼
……烏
……田
……浩
……井
……智
……了
……敏
……空
……榮
……深
……洞

定價 一部十二錢 六月號 一月號 廿四錢 一年一圓三十錢

發賣元 東京巢鴨二ノ三五 無我山房 振替三二二番

感化百世に及ぶ一大良書

擬講 舘登師著 ● 義順嗣講百話 定價十二錢

香樹院師肖像並墓碑寫眞版口繪 無爲信寺所傳臨末遺狀眞蹟石版摺
眞宗京都中學教授 大須賀秀道先生編纂

香樹院教訓集

製本 竪六寸巾四寸二分 全文四號活字 平假名振假名付 總布ロース表金文字入 堅牢洋綴美裝 七百頁內外

內容

第一篇 信心百話
香樹院の法語中、信仰決得に切實なるもの百條を選錄す『得易クシテ得難キハ他力ノ信心』歎ばれぬは地獄の業緣切れぬか らなりと 嚴烈なる敎訓、之を讀めば世の立派なる信者は、大抵自ら未だ眞實信ならぬことを覺るべし

第二篇 修養百話
信後の修養に關する敎訓百條を錄す、學問の用意、處世の覺悟、後念の相續、俗諦のタシナミに至るまで 諄々として敎諭すること慈親の愛兒に語るが如きもの、何れも師が實驗上の垂訓ならざるはなし

第參篇 家庭百話
家庭の中に於ける師が示談相續百條を錄す一家內亭主に對し、女房に對し、隱居、若者、嫁、子供、嬶僕にまで 何れも佛法の上より其心得方を諭さゝるはなし、之を讀まば家內に風波の起る憂ひあることなし、

第四篇 逸傳百話
師が一代の傳歷、逸語、性情、書簡、詩歌等從來世人に知られざるもの百條を蒐む、蓋、是れ師が一代の言行錄にして、之を讀まば師が偉大なる道德的人格に觸れ 音容眼前に現れ、活ける敎訓に接すること得べし、

豫約 定價金壹圓五拾錢 郵稅八錢
方法 ● 豫約期限六月中 ● 豫約金壹圓 郵稅八錢
● 期限經過後は定價に復す ● 前金に非ざれば豫約と見做さず ● 製本九月上旬より着金順により送本

大須賀道師序 ● 妙好人百話 定價二十錢

申込所 京都市東六條 電話 ロ座 二五四 二五二 八一番 法藏館

道德千載に輝く一大珍什

南條文雄博士了師題辭 福井博士師題辭 ● 親鸞聖人 再版 定價 四十錢 郵稅 六錢

◎法藏第二百號記念發刊廣告◎

文學博士 南條文雄師監修
眞宗大學教授 住田智見師謹輯

● 親鸞聖人全書 上製 定價八十錢 特製 定價一圓五十錢

● 法藏記念號!! ● 法藏記念號!!

大悲の加祐と讀者の愛顧に由り『法藏』は二百號に到達せり、感喜何そ禁せむ。由て聊か祝意を表して紀念號を發行し以て大方の眷愛に酬ゐ且つ將來の發展を期せんとす。

『法藏』記念 二百號 見眞大師

菊版頁數百四十頁 一部賣價 金貳拾五錢 郵稅四錢を以て頒布す

あゝ近けり、宗祖大師御遠忌は近けり、愈々仰かるゝは親鸞聖人の御偉德なり。されば本號には、敎界に名聲嘖々たる左の諸名家に乞ひ、諸方面より大師の偉德を讃仰し、眞信の光を發揮せんとす。

一 見眞大師 南條文學博士
二 見眞大師の恩德 吉谷覺壽講師
三 見眞大師の敎義 村上文學博士
四 見眞大師の人格 近角和田文學博士
五 見眞大師の人格 齋藤唯信龍造師
六 見眞大師の革新 須賀秀道師
七 見眞大師の修養 大河內了師
八 見眞大師の家庭 崎顯一師
九 見眞大師の慰安 安藤州師
一〇 見眞大師の謙德 多田鼎師

一一 見眞大師の靈感 閻魔石野虎門師
一二 見眞大師の度量 日野沼田惠實師
一三 見眞大師の處世 曉烏敏師
一四 見眞大師の敎布 今井春翠師
一五 見眞大師の精神 住田靜緣師
一六 見眞大師の安心 橋谷敏師
一七 見眞大師の信仰 舟藤敏師
一八 見眞大師の妻帶 朝倉敏師
一九 見眞大師の化導 藤谷昇師
二〇 見眞大師の說號 水還智見師

● 月刊雜誌 法藏二 ● 毎月一回一日發行 ● 定價一部十錢 ● 半年分金六十錢 ● 一年分金一圓二錢 ▲人生煩悶ある人は早く『法藏』に相談せよ ▲信仰に疑ある人は早く『法藏』に批判を乞へ

發行所 京都市東六條 電話 ロ座 二五四 二五二 八一番 法藏館

毎月一回一日發行七月一日六號發行
價一冊十五錢
稅一錢六冊
共九十錢

第一卷

アカネ

第六號

發行所 東京駒込千駄木町五十番地 根岸短歌會

小說 行く春

甲之

現代の腐敗せる社會は破壞によつて改革せざる可からず。個人は死によつて自覺せざる可からず。破滅の哀情を懷いて落日に對する時胸に湧き來るは不滅の意志力也。目に映するは天界の莊嚴也。物質的文明の煩雜を厭ふものは來つて死の甘藥を味ひ、闇夜に輝く一道の光明に浴せよ。

詩壇漫言

三井 甲之

●現代詩界
●岩野泡鳴氏近作闇の盃盤を評す
●現代惡風潮に漂はされたる歌俳

俳句頓門

大順賀乙字選

●俳句は眞實なるを要す
●「俳諧散心」及「俳句解釋」の句を評す
●詩話と俳句作法

募集俳句
募集短歌
短歌雜詠
俳句雜詠
長詩數篇

碧童乙字選
甲之 選
長塚 節等
松下紫人等
蛇床子等

將來の文藝に對す吾人の態度（消息）

甲之

現代佛國詩人テドナ及其作

茨園生

フローベール作 妻……廣瀨靑波譯

香月院師肖像及筆蹟寫眞版口繪
和田龍造
今津紹柱 共著

香月院語錄

製 堅六寸幅四寸三分
全文四號活字平假名付總クロース表
背金文字入堅牢洋綴美裝四百五十頁
本

●定價金壹圓 郵稅八錢
●豫約價金七拾錢 郵稅八錢
●豫約期限七月中 ●期限經過後は定價に復す ●前金に非ざれば豫約と見做さず ●製本九月上旬より着金順により送本

豫約方法

信界の明星、宗學の巨人 香月院深勵師講師あるは天下知らるものなしされど具さに其活けるを味ひ深き信仰に觸るゝもの世甚だ稀なり、和田今津の二師此に觀るあり香月院師の講錄、法話、示談等皆ゝ之を涉獵し信念の機微に觸れ他力教義の幽奧を發揮せる者三百四十條を抄出して本書をなす安心あり道德あり譬喩あり教訓あり妙解あり示談あり、詩歌あり宗祖信念、蓮師の道化綱羅せられざるものなし、苟も信仰の修養に志すもの、布教の任にある者須らく座右に備ふべきは本書なり

申込所 京都市東六條 電話座二二五四 電口二二五五 八番一番 法藏館

近角常觀著（近刊之豫定）

增補 信仰之餘瀝 定價貳拾錢 郵稅貳錢

近角常觀著（再版準備中）

人生と信仰 定價貳拾錢 郵稅貳錢

近角常觀校訂（再版）

冠頭 歎異鈔 一冊郵稅共七錢（定價五錢郵稅二錢）但三冊までは郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

近角常觀著（第四版）

懺悔錄 定價貳拾錢 郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區卷木町二丁目二十一番地 森江分店

賣捌所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

規定

一、本誌は毎月一回一日發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便局」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治四十一年五月廿八日印刷
明治四十一年六月一日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所 求道發行所
東京市神田區表神保町
大賣捌所 東京堂

前號要目

求道

◎本願　講話　近角常觀

◎眞の佛弟子　告白　近角常觀

◎本誓重願空しからず　講義　林英三

◎歎異鈔—第七章、第九章　近角常觀

慶歎

◎眞宗慶嘆　十二　眞佛假佛　近角常觀

歌詠

◎春光《長詩》　甲之

◎一日なりとも《短歌》　左千夫

時報

◎眷季傳導概況◎四思爪生會

求道第五卷第六號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十一年六月一日發行（毎月一回一日發行）

東京市麹町區土手町二ノ一　三光堂印刷